はりつけ原遺跡

2002年12月

長野県飯田市教育委員会

はりつけ原遺跡

2002年12月

長野県飯田市教育委員会

序

私たちの飯田市は、美しい自然に恵まれ、長い歴史と尊い伝統文化につつまれた人情豊かなまちとして知られており、市民憲章では「伝統を生かし、文化の香り高い飯田市をつくります」と宣言しています。飯田市は伝統産業が20業種にのぼり全国有数を誇っており、その一つとして水引があります。もともと当地方は、江戸時代初めには名古屋で盛んだった元結の原料である和紙の生産地でしたが、元禄時代に飯田藩主堀公の産業政策により元結づくりが始まったそうです。水引はその伝統を引いていて、明治初年の断髪令を機に水引生産に転じて盛んになったといわれています。今や観光資源としても活かされるなど、時代のニーズにあった事業展開が図られつつあります。今次の計画工事はこうした水引製作などに携わる木下水引株式会社が倉庫を建設するもので、地場産業の振興の観点からその建設はやむを得ないものと考えられます。

しかし、一方で今回工事が計画されましたところは、埋蔵文化財包蔵地の「はりつけ原遺跡」の一画にあたります。はりつけ原とは何とも物騒な地名ではありますが、これまでに市道建設や民間開発に先立って試掘・発掘調査が実施されまして、今から1,800年ほど前の弥生時代の住居やお墓といったムラのあとが見つかっており、中位段丘上の厳しい条件の下で稲作・畑作を組み合わせて生活していた様子がうかがえます。今回の発掘調査でも今から4,500年ほど前の縄文時代のムラの一画が調査され、さらに、中世の頃には井水を引いて段丘上の開発を進め、伊賀良庄の中核としてその隆盛を担った様子がうかがえるということです。

たゆみない文化財保護活動により、このような地域の歴史が次第に明らかになりつつありますが、調査記録をとどめた本報告書が活用されてはじめて、地区および市域の方々の財産として生命を与えられることになり、そうなることを切に望む次第です。

最後になりましたが、文化財保護の本旨にご理解を賜りご協力いただきました木下水引株式会社、ならびに発掘調査に従事された関係者の方々に深甚なる感謝を捧げまして発刊の辞といたします。

平成14年12月

飯田市教育委員会

教育長　冨　田　恭　啓

例　言

1．本書は民間の倉庫建設に先立って実施された、長野県飯田市大瀬木はりつけ原遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は木下水引株式会社の委託を受け、飯田市教育委員会が直営実施した。

3．調査は、平成13年度に現地作業、14年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。

4．調査実施にあたり、基準点測量を株式会社ジャステックに委託した。

5．発掘作業・整理作業にあたり、遺跡略号としてＨＴＢに地番220-1を付してＨＴＢ220-1を一貫して用いた。

6．本報告書では以下の遺構略号を使用している。
　竪穴住居址－ＳＢ、土坑－ＳＫ、溝址・溝状址－ＳＤ

7．本書の記載順は遺構別を優先し、遺構図は挿図とした。

8．土層の色調については、『新版標準土色帖』1998年版の表示に基づいて示した。

9．本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により馬場保之が行った。

10．本書の執筆と編集は馬場が行った。

11．本書の遺構図の中に記した数字は、検出面および遺構床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。

12．本書に掲載した石器実測図の表現は『美女遺跡』（飯田市教育委員会　1998a）に準拠した。なお、節理面は斜線で示した。

13．本書に関連した出土遺物および図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館・飯田市上郷考古博物館に保管している。

目　次

本　文　目　次

序

例言

目次

第Ⅰ章　経過……1
　第1節　調査に至るまでの経過……1
　第2節　調査の経過……1
　第3節　調査組織……1
第Ⅱ章　遺跡の環境……3
　第1節　自然環境……3
　第2節　歴史環境……3
第Ⅲ章　調査結果……11
　第1節　調査区の設定……11
　第2節　基本層序……11
　第3節　遺構および遺物……11
　(1)竪穴住居址……11
　(2)土坑……13
　(3)溝址・溝状址……13
　(4)小柱穴……22
　(5)遺構外出土遺物……22
第Ⅳ章　総括……23
　引用参考文献……24
　報告書抄録……38

挿　図　目　次

挿図1　調査遺跡および周辺遺跡位置図……4
挿図2　調査地点周辺地形図および調査区位置図……7
挿図3　基準メッシュ図区画調査位置……8
挿図4　基本層序……9・10
挿図5　遺構分布図……11
挿図6　ＳＢ15、ＳＤ13・ＳＤ14……12
挿図7　ＳＫ10～ＳＫ23……14
挿図8　ＳＫ24～ＳＫ37……15
挿図9　ＳＫ38～ＳＫ52……16
挿図10　ＳＫ53～ＳＫ68……17
挿図11　ＳＫ69～ＳＫ71・ＳＫ73～ＳＫ81……18
挿図12　ＳＫ82～ＳＫ94・ＳＫ105・ＳＫ108……19
挿図13　ＳＫ95～ＳＫ104・ＳＫ106・ＳＫ107……20
挿図14　周辺柱穴平面図……21

表　目　次

表1　土層観察表……22
表2　遺構属性表(1)……25
表3　遺構属性表(2)……26
表4　遺構属性表(3)……27

図　版　目　次

第1図　遺構および遺構外出土遺物(1)……28
第2図　遺構および遺構外出土遺物(2)……29

写真図版目次

図版1　調査区全景……32
図版2　ＳＢ15　ＳＫ33……33
図版3　ＳＫ44　ＳＫ45　ＳＫ54……34
図版4　ＳＫ62　ＳＫ85　ＳＫ87……35
図版5　ＳＫ104　ＳＤ13　ＳＤ14……36
図版6　重機作業風景　発掘作業風景……37

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

平成13年11月２日、長野県飯田市上殿岡８－１　木下水引株式会社　代表取締役　木下祐一より、飯田市大瀬木220-1番地における倉庫建設の計画が提示された。事業計画地は埋蔵文化財包蔵地はりつけ原遺跡にかかる。そこで、試掘調査を実施しその結果に基づいて改めて協議することとなった。

協議に基づいて試掘調査を平成13年11月７～12日に実施した。その結果縄文時代中期の遺構・遺物があり、工事計画地の一部について本調査を実施することが必要であると判断された。そこで再度二者協議を行い、本発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査の経過

平成13年12月13日委受託契約を締結し、12月14日本発掘調査に着手した。まず、重機を入れて表土を剥ぎ、基準点設置・グリッド設定を行った。引き続き12月25日から作業員を入れて、遺構検出・同掘り下げ作業を行った。各遺構の精査の後、写真撮影・測量調査等を行い、１月９日現地での作業を終了した。引き続き、飯田市考古資料館において基礎的な整理作業を行い、概報作成作業にあたった。

平成14年度は、出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、遺物の実測・拓本とり、遺構図等の作成・トレース作業、写真類の整理、版組み等整理作業を行い、報告書作成作業にあたった。

第３節　調査組織

(1)調査団

調査主体者　飯田市教育委員会　教育長　冨田泰啓

調査担当者　馬場保之

調　査　員　佐々木嘉和・渋谷恵美子・吉川金利・伊藤尚志・下平博行・坂井勇雄・羽生俊郎

作　業　員　伊藤和恵・伊藤孝人・伊東裕子・木下力弥・熊崎三代吉・佐々木一平・代田和登
杉山春樹・竹村和子・竹村定満・竹本常子・中野満里子・中野充夫・仲村　信
服部光男・林　伸好・牧内　修・牧ノ内昭吉・松井明治・松下成司・松下博子
三浦照夫・山田康夫
新井ゆり子・池田幸子・金井照子・唐沢古千代・木下早苗・木下玲子・小池千津子
小平まなみ・小林千枝・斎藤徳子・佐々木真奈美・佐藤知代子・関島真由美

高木純子・橘　千賀子・筒井千恵子・中沢温子・中田　恵・中平けい子・林勢紀子
林ひとみ・原　昭子・平栗陽子・福沢育子・牧内喜久子・牧内八代・松本恭子
三浦厚子・宮内真理子・森藤美知子・森山律子・吉川悦子・吉川紀美子

(2)指導

長野県教育委員会文化財・生涯学習課

財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

(3)事務局

飯田市教育委員会

久保田裕久（教育次長）
中島　修　（生涯学習課長）
小林正春　（生涯学習課文化財保護係長）
馬場保之　（生涯学習課文化財保護係）
渋谷恵美子（　〃　）
吉川金利　（　〃　）
伊藤尚志　（　〃　）
下平博行　（　〃　、平成13年度）
坂井勇雄　（　〃　）
羽生俊郎　（　〃　）
宮田和久　（学校教育課総務係）
福沢恵子　（　〃　、平成13年度）

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　自然環境

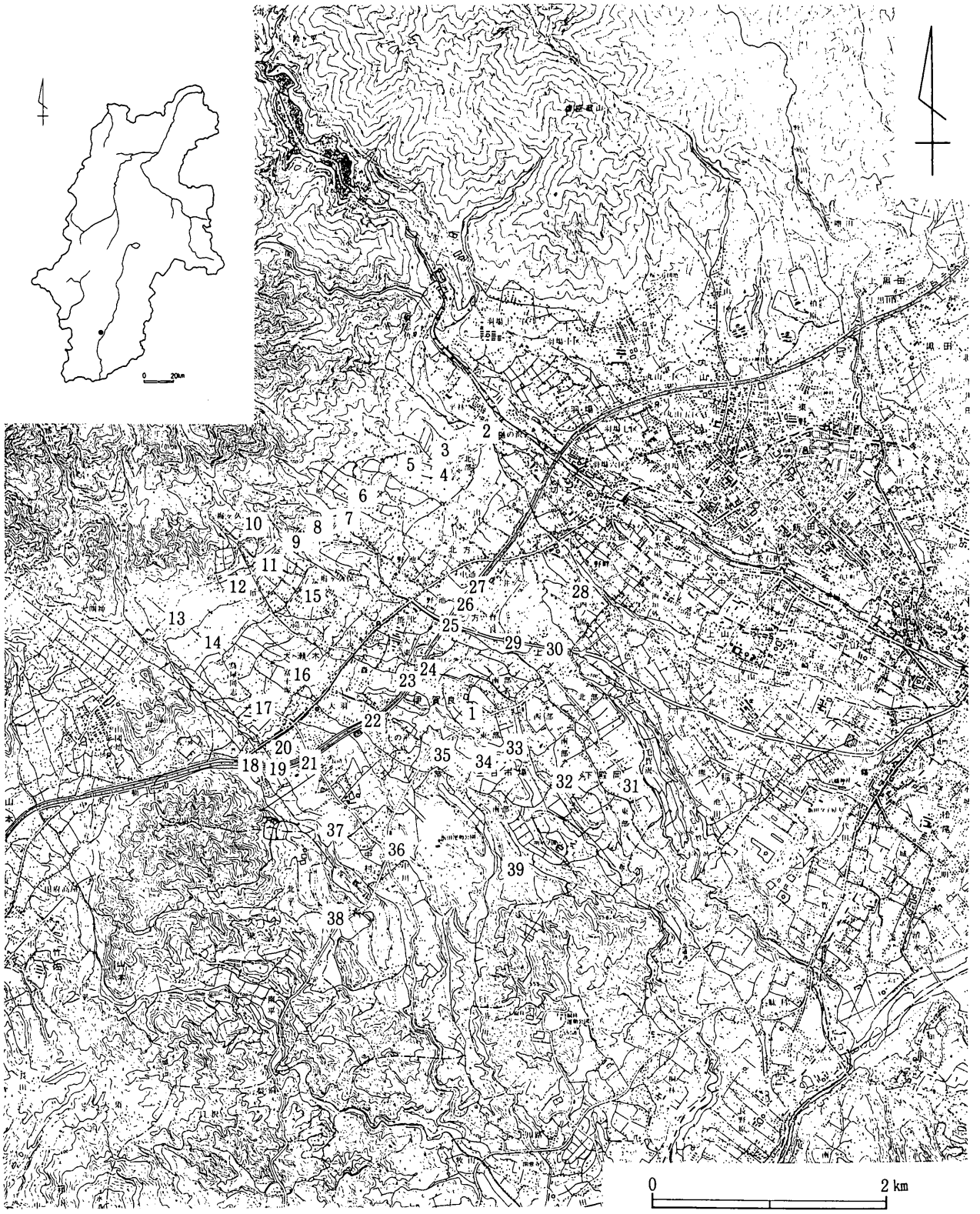
伊賀良地区は飯田市西部にあり、飯田市街地の南西に位置する。北側は鼎地区、東側は松尾・竜丘地区、南側は山本・三穂地区に接する。

飯田市は伊那山脈と中央アルプスにはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川に平行する河岸段丘地形を特徴とするが、両山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成された結果であり、複雑な段丘地形を呈している。伊賀良地区の場合、西側と東側で大きく地形が変化している。西半は中央アルプスの前山である笠松山（1271m）・高鳥屋山（1397m）東山麓にあたり、飯田松川・茂都計川をはじめ、笠松山・高鳥屋山から流れ出す入野沢川・南沢川・滝沢川・新川等の河川によって形成された広大な扇状地が広がる。扇端はおおむね北方地籍では新井付近、大瀬木で伊賀良小学校付近、中村の長清寺付近であり、これより西側は傾斜の比較的急な斜面となっている。扇端の一部は前述の線を大きく越えて東側に伸びており、下殿岡地籍まで達するものもある。扇端付近では通例の如く湧水が豊かであるが、この扇状地が小河川により幾重にも複合して形成されているため、比較的湧水に恵まれ、今日でも横井戸を利用している住宅がみられる。扇状地の形成に大きな役割を果たした小河川は現在は堆積作用より下谷作用に転じているが、浸蝕力は弱く、開析谷の規模は比較的小さい。これに対し、地区の東側は基本的には中位の段丘面が占めており、扇端から離れるほど地下水位が低くなる。古代末以来、この高燥な地帯への井水の開削が繰り返し行なわれ、大井をはじめ多くの井水が開けられているほか、地区内の大小河川には人為的な改変が加えられてきた。

はりつけ原遺跡は、笠松山系から東流する新川と滝沢川に挟まれた島状の微高地に位置し、遺跡の南側は新川が谷を刻んでいる。その比高差は遺跡中央部で約10m程度である。また、北側は比高差約３ｍで低地を控えている。本遺跡は全体的にロームが良好に遺存しており、集落を営むのに適した所といえる。

第２節　歴史環境

伊賀良地区は埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布しており、これまで発掘調査がなされた遺跡は、学術調査による立野・山口・西の原各遺跡、中央自動車道建設にかかる与志原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外（辻垣外）・三壷渕・上の金谷各遺跡、一般国道 153号飯田バイパス建設にかかる殿原・八幡面・小垣外各遺跡、広域農道西部山麓線建設にかかる飯田垣外・火振原・梅ヶ久保・細田北・河原林・大原・直刀原・入野・立野・北方北の原各遺跡、諸開発に伴う中島平・宮ノ先・酒屋前・鳥屋平・下原・高野・公文所前・三尋石・増泉寺付近・富士塚・富の平・中村中平・はりつけ原・中川・柵口等の各遺跡と樋明古墳がある。



1．はりつけ原遺跡　2．北方北の原遺跡　3．山口遺跡　4．立野遺跡　5．入野遺跡
6．大原遺跡　7．直刀原遺跡　8．河原林遺跡　9．細田北遺跡　10．桜山城跡
11．梅ヶ久保遺跡　12．火振原遺跡　13．飯田垣外遺跡　14．富の平遺跡　15．三尋石遺跡
16．増泉寺付近遺跡　17．鳥屋平遺跡　18．与志原遺跡　19．上の平東部遺跡　20．樋明古墳
21．寺山遺跡　22．六反田遺跡　23．大東遺跡　24．酒屋前遺跡　25．小垣外・辻垣外遺跡
26．三壷渕遺跡　27．上の金谷遺跡　28．西の原遺跡　29．八幡面遺跡　30．殿原遺跡　31．下原遺跡
32．公文所前遺跡　33．中島平遺跡　34．宮ノ先遺跡　35．柵口遺跡・三日市場城跡
36．中川遺跡　37．中村中平遺跡　38．高野遺跡　39．土師洞窯址

第1図　調査遺跡および周辺遺跡の位置

こうした文化財に表われた先人達の足跡は後期旧石器時代までさかのぼり、大東遺跡からナイフ形石器と小形の石核が出土している。本地区南側の山本地区では石子原遺跡や竹佐中原遺跡では後期以前にさかのぼると考えられる石器群が出土しており、同様の地形がみられる本地区においても今後古い時期の遺跡がみつかる可能性がある。

縄文時代では、北方北の原遺跡・立野遺跡・山口遺跡といった草創期～前期の遺跡は主に笠松山麓の比較的標高の高い所に立地している。北方北の原遺跡では草創期の爪形文土器や早期にかけての表裏縄文土器が出土している。前期終末では辻垣外・殿原遺跡等扇状地の扇端付近の遺跡で竪穴住居址が調査されている。中期の遺跡は伊賀良地区の広範に分布しており、中央自動車道・西部山麓線路線や圃場整備事業に関わって調査された扇状地上の諸遺跡や下原・公文所前といった段丘上の遺跡がある。殊に下原遺跡では該期の中心的役割を果たしたと考えられる大集落の一画が調査されている。後期中葉から晩期にかけては、茂都計川に面した中村中平遺跡で、配石址・竪穴住居址・配石墓等の遺構や土偶・土製耳飾り・石棒・石剣を含むの多量の遺物が調査され、不明な点の多かった該期の様子が解明されると期待されている。また、酒屋前・辻垣外・殿原遺跡で断片的な資料ではあるものの、遺構・遺物が確認されているし、中川遺跡では土偶の脚部が出土している。北方北の原遺跡では、晩期後葉の住居址や土器棺墓群が調査されている。

弥生時代においても集落立地は基本的に前時代と変わらないと考えられるが、前期・中期についてはなお不明である。後期になると、遺跡数が増加するとともに調査例も増す。本遺跡では、弥生時代後期後半を中心に竪穴住居址14棟・方形周溝墓８基が調査されており、住居址の主軸方向から２時期以上の居住域の変遷が把握されている。また、住居址と周溝墓の切合関係から、居住域から墓域へ空間利用が変化したことが明らかにされた。他にこれまで調査された遺跡としては、三尋石・大東・上の金谷・酒屋前・滝沢井尻・宮ノ先・中島平・柵口・中村中平・中川遺跡等がある。該期の集落展開としては、扇状地末端の湧水線および西方前山から東流する大小河川を利用した水田経営と中位段丘上での陸耕を基盤とするものが考えられる。殿原遺跡ではこれまで90軒にのぼる竪穴住居址が調査される等、大規模な集落が営まれていたことが判明している。また、細田北遺跡では標高 700ｍを超える高所から 3軒の竪穴住居址が発見されており、人口の爆発的な増加とこうした高所にまで生産基盤を拡大するまでに至る生産力の向上を看取できる。

古墳は伊賀良地区では52基が確認されているが、現存するものは 9基にすぎない。隣接する竜丘・松尾地区に比べ数も少なく、いずれも規模の小さい円墳である。これまで調査された古墳は、後期の横穴式石室を有する樋明古墳のみである。また、同時代の集落址の調査例は少なく、前期の上の金谷・富の平遺跡、後期の三壷渕・中島平・中村中平遺跡が調査されているのみである。遺跡数も前時代に比べると著しく減少しており、湧水・湿地を控えた集落の展開が考えられる。さらに、地区内北方地籍には条里が敷かれたとも指摘されており、水田経営の定着した姿を想定することができよう。

奈良時代については、具体的な遺構・遺物の調査例は中村中平遺跡のみであり、掘立柱建物址が単独で調査されたのみで、詳細は不明である。地区内には、古代東山道の経路および「育良駅」の推定地や、荘園を構成する村落の起源等に関連すると思われる箇所があり、重要な役割を果たした地区ということができる。

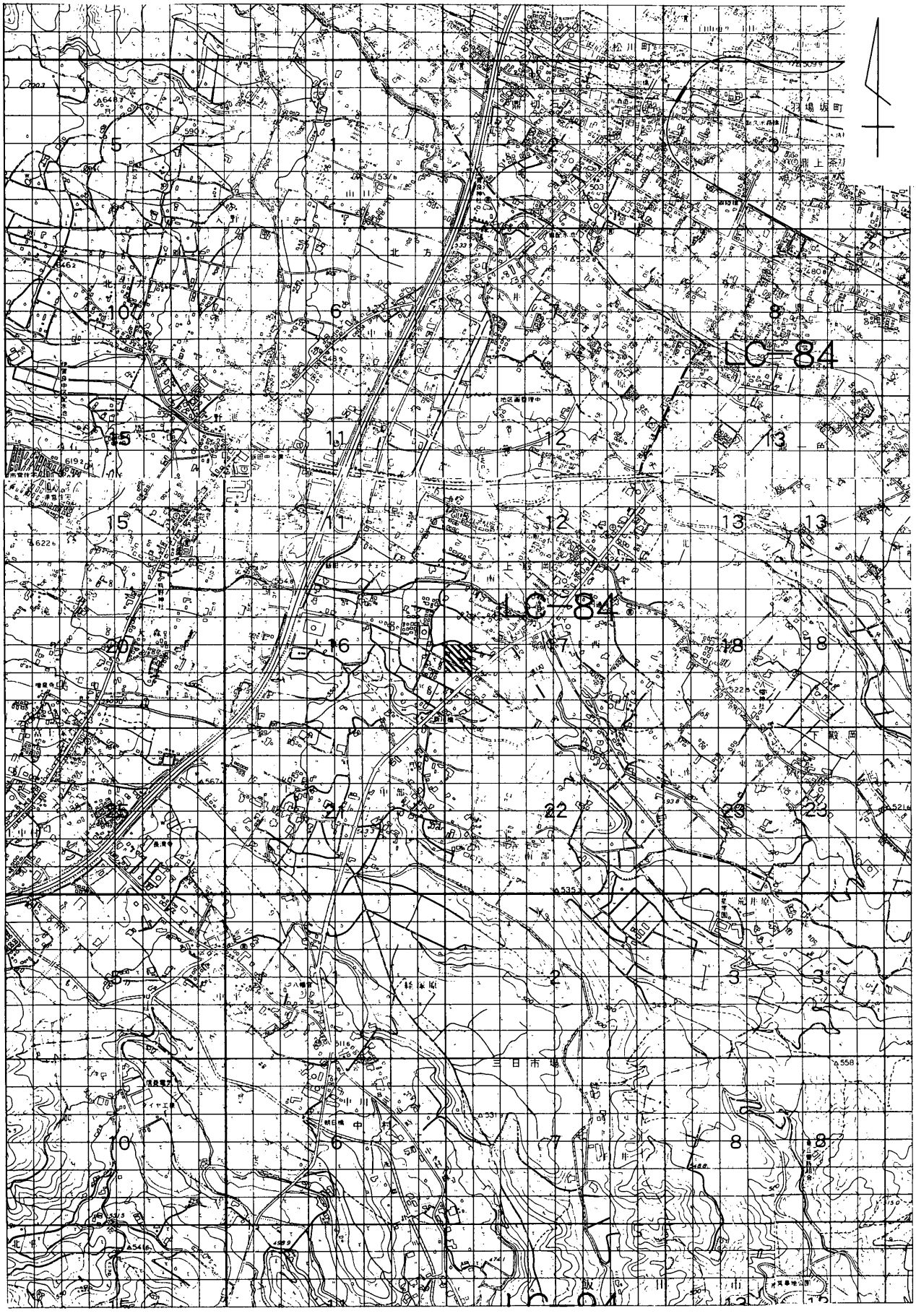
平安時代については、その末期には伊賀良庄の名が文書に登場する。そのなかには中村・久米・川路・殿岡が含まれることが文献等により明らかにされており、当地区がその中心的な位置を占めたことが考えられる。当地区における大規模な井水開発の歴史は、この時代にはじまるともいわれている。殿原遺跡の調査結果はこうした説をある程度裏付けるものといえる。一方、これまで実施された発掘調査の結果、六反田・滝沢井尻・小垣外・三壷渕・上の金谷・宮ノ先・公文所前遺跡等地区内のほぼ全域にわたり、集落址の一部が調査されている。伊賀良庄の成立がどこまで遡るかは不明であるが、この時代の集落が前時代よりも増加することは、この地区の開発が一段と進んだ証左であろう。隣接する山本久米地区には真言宗の古刹光明寺がある。胎内に「保延六年」（1140年）の銘を持つ薬師如来坐像があることから、寺の創建はこれより遡ると考えられ、伊那谷の中ではいちはやく中央の文化を取り入れた先進地域の一つであったと思われる。また、さらに、この時代には三日市場地籍に須恵器を生産した土器（かわらけ）洞窯跡があり、ここで生産された須恵器が下伊那全域に分布するなど、手工業生産の発達がみられる。

中世においては鎌倉時代には北条時政が伊賀良庄地頭であり、以後一族の江馬氏がこれを継いだ。その地頭代が地区内に居を構えたことは疑いなく、鎌倉末期には荘園を自領化していたことが三浦和田文書に窺える。この時代の文化財としては、藤原様式の流れを汲む鎌倉初期の光明寺の阿弥陀如来坐像（重要文化財指定）がある。

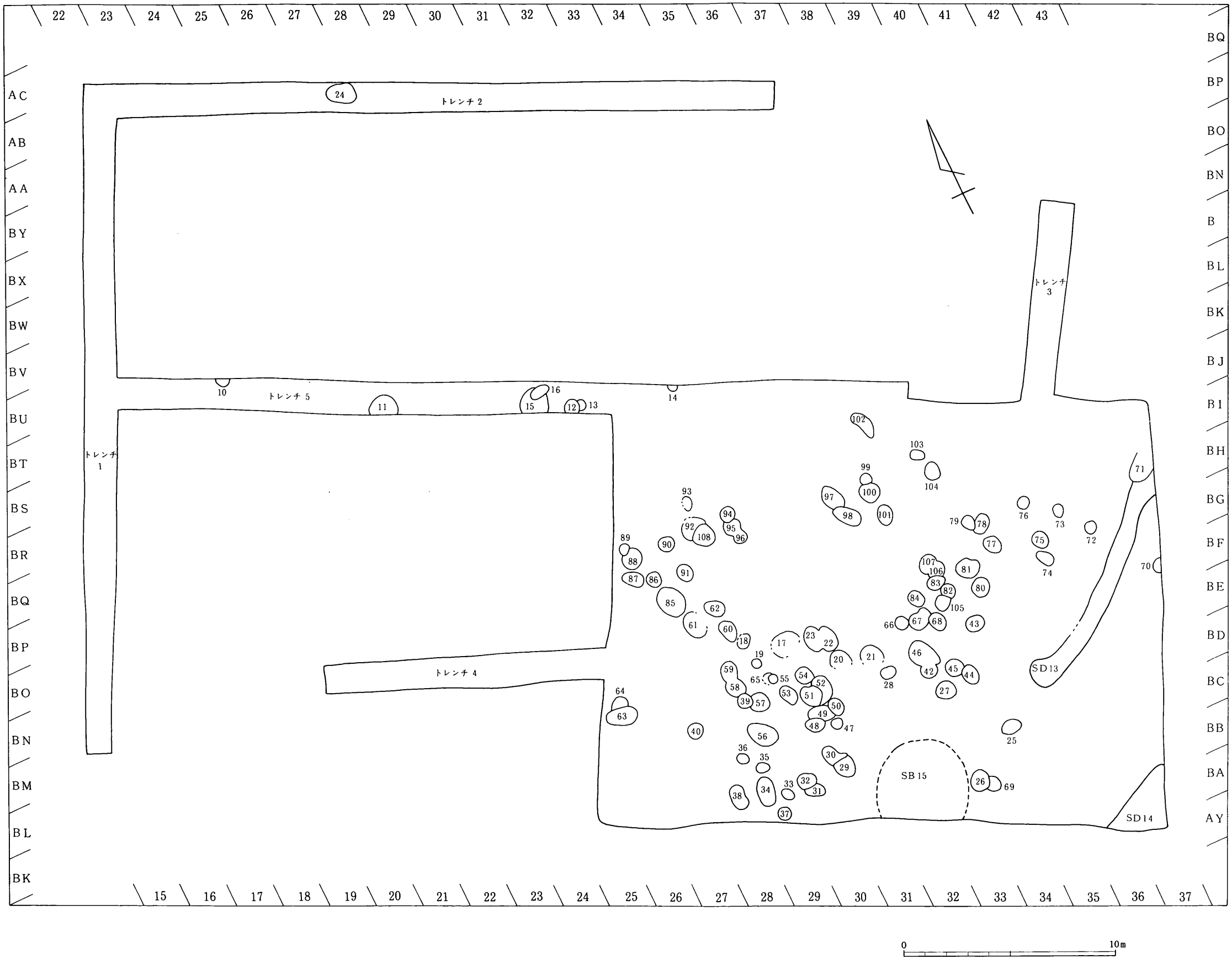
北条氏の滅亡後、信濃守護職小笠原氏は伊賀良庄を与えられ、その下で伊賀良地区の開発は急速に進んだとされる。地区内の井水の大半はこの時代の開発と考えられ、小笠原氏の勢力伸長の基盤として当地区が大きな役割を果たしたといえる。室町時代中期以降、小笠原氏内訌に伴い松尾城・鈴岡城の支城が各地に築かれ、地区内には下の城跡・桜山城跡がある。

以上、各時代について概観したが、上述の内容のとおり、本遺跡は主に弥生時代・中世に関わる遺跡として注目される。

挿図２　調査地点周辺地形図および調査区位置図



挿図３　基準メッシュ図区画調査位地



挿図 4　遺構全体図

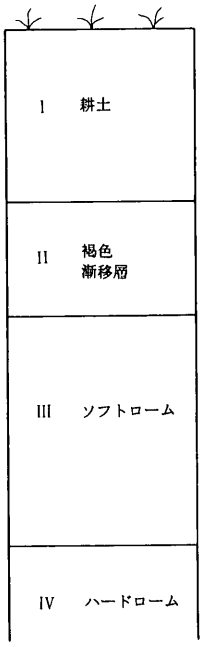
第Ⅲ章　調査結果

第１節　調査区の設定

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した（設定方法については、飯田市教育委員会　2002　『開善寺境内遺跡』他参照）。今次調査地点は、ＬＣ－8417－26内に位置する（挿図３）。

第２節　基本層序（挿図５）

試掘調査時にトレンチ（Ｔ５）西端で把握した。模式図のとおり、耕土（層厚約30cm）下に褐色の漸移層（同約20cm）、ソフトローム（同約40cm）で、以下ハードロームとなる。本調査区付近では漸移層はほとんどなく、厳しい堆積環境下にあって土壌は発達せず、遺構・遺物はかなり影響を受けていると考えられる。なお、ソフトローム上面が遺構検出面である。



挿図５　基本層序

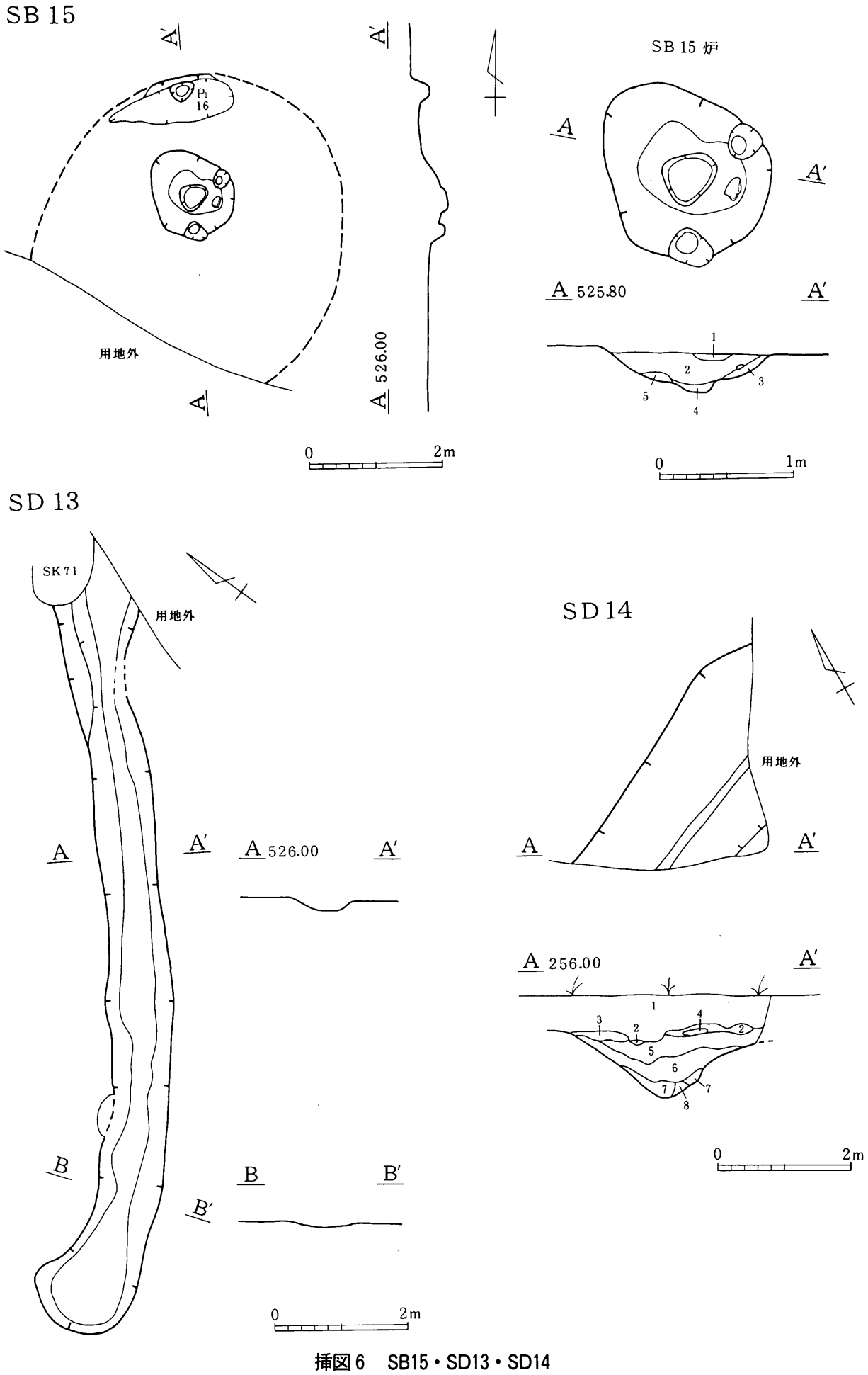
第３節　遺構と遺物（挿図４）

今次調査では、竪穴住居址１棟、土坑98基、溝址・溝状址２条、周辺柱穴が調査され、縄文時代および中世の遺物が出土した。

(1)竪穴住居址

①ＳＢ15（挿図６）

［検出位置］ＢＤ32付近　［規模］（5.0）×4.4m、深さ10cm　［床面積］（14.5）㎡［形態］楕円形を呈すると考えられる　［主軸］Ｎ26°Ｅ　［重複］なし　［調査所見］表土直下、遺構検出作業中に床面が把握された。上部は削平を受けており、遺存状態はあまり良好でない。推定プランは硬い床面の把握された範囲である。調査区際で壁の立ち上がり・埋土等把握に努めたが、把握できなかった　［壁］北側でごく一部分把握したにとどまる。やや緩やかな立ち上がりを示すと考えられる　［床］非常に硬く締まっており、貼床はされていない。中央が壁際よりやや低い　［柱穴］精査したが主柱穴等は確認できず。小柱穴が数基検出されたが、埋土はＳＫに比較して黒味が強くかつぼそぼそで締まっておらず、本址に伴わないと判断した　［炉］中央やや北壁寄りに炉址と考えられる掘り込みがあり、内部には多量の炭が入っていたが、底面等は焼けていなかった。炉石は遺存しておらず、抜き取られている。形態



挿図6　SB15・SD13・SD14

からいわゆる「掘炬燵」形の炉と考えられる　[付属施設]カマド想定位置の反対側南西壁ほぼ中央に入り口部と考えられる掘り込みがある　[出土遺物]きわめて僅少　[時期] 詳細時期は不明であるが、炉址の形態から縄文時代中期後葉の住居址と考えられる。

(2)土坑（挿図７～13、第１・２図）

調査区のほぼ中央、東西方向に弧状に土坑群が分布する。円形・楕円形・不整円形・不整楕円形を呈するものが大半を占める。長軸方向はややばらつきがあるものの、用地北側に向かって求心的に長軸が並ぶ傾向が看取される。楕円形・不整楕円形を呈するものについてみると、概ねN30°Ｅ～N110°Ｗをとり、Ｎ０°Ｗ～Ｎ40°Ｗの範囲に入るものが多い。長径42～150cm・短径30～126cmで、深さは９～64cmとばらつくが10～40cm程度のものが多い。ＳＫ12からは朱漆入りの小型の深鉢（第１図１）が立位で出土した。ＳＫ63はハードロームが持ち上がった部分は確認できなかったものの、壁が明確でなく、風倒木痕と考えられる。

土坑出土遺物のうち、土器はＳＫ14－細隆線文の施された口縁部付近破片（２）、ＳＫ29－櫛形文の施された体部上半破片（３）、ＳＫ32－把手（４）、ＳＫ45－細隆線文（５）・櫛形文（６）、ＳＫ69－細隆線文（７・８）、ＳＫ87－細隆線文の把手部分（９）、ＳＫ91－櫛形文（10）、ＳＫ96－細隆線文（11）、ＳＫ98－隆沈線＋条線文（12）といった縄文時代中期中葉末～後葉を中心としたものが多い。石器はＳＫ18－横刃型石器（硬砂岩）、ＳＫ19－横刃型石器（硬砂岩）、ＳＫ63－横刃型石器（硬砂岩）、ＳＫ67－磨石（花崗岩）、ＳＫ98－小型打製石斧（硬砂岩）がある。

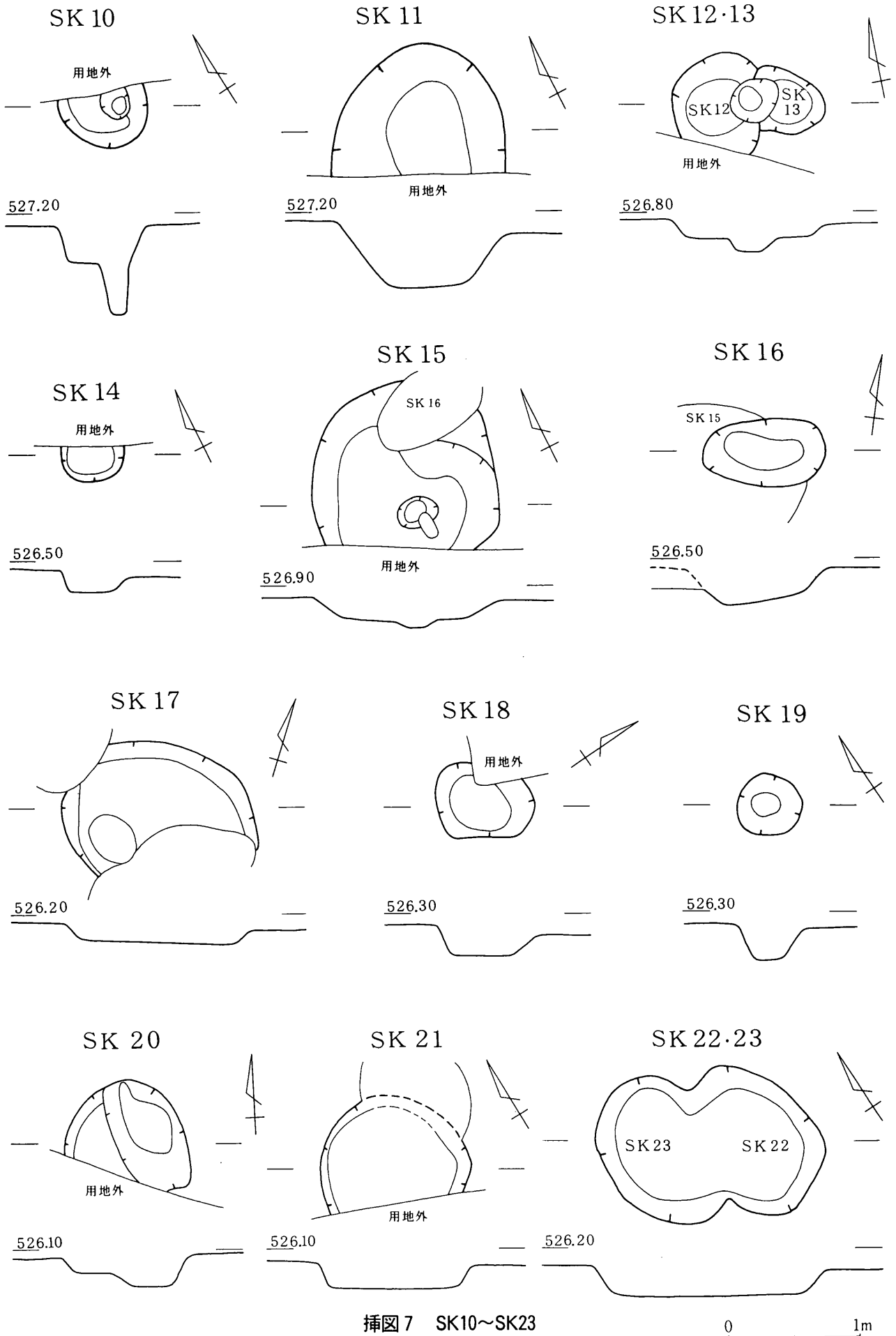
(3)溝址・溝状址

①ＳＤ13（挿図６）

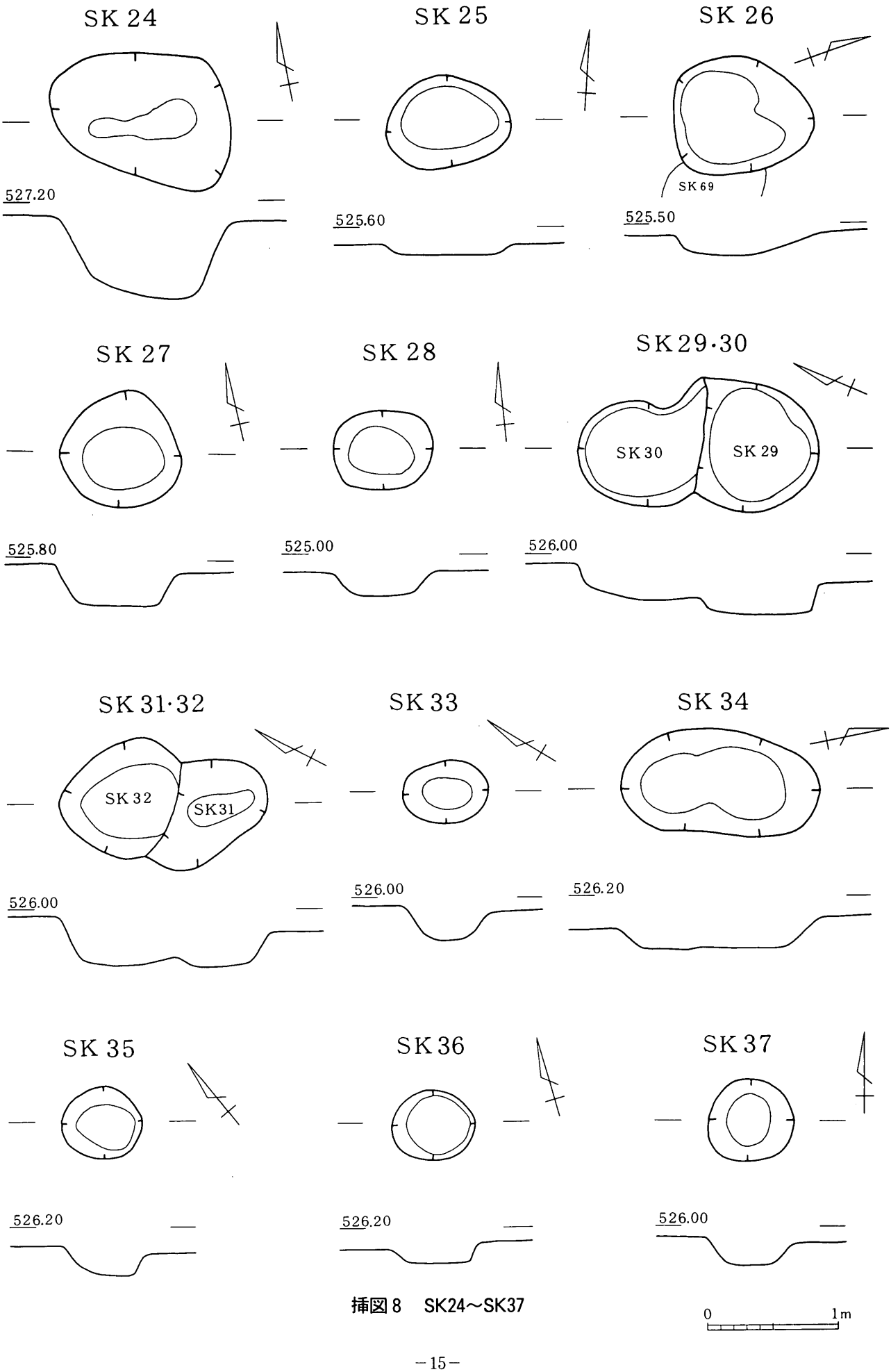
[検出位置] ＢＧ39付近　[規模] 11m以上×0.8～1.45m、深さ９～21cm　[形態] 弧状　[長軸] 北側Ｎ44°Ｅ、南側Ｎ58°Ｅ　[重複] ＳＫ41・ＳＫ71と重複するが、新旧関係は把握できず　[調査所見] 埋土が縄文時代の土坑と同じである　[壁] だらだらと立ち上がる　[底面] 凹凸はなく、ほぼ平坦。水の流れた痕跡等はなし　[付属施設]なし　[出土遺物]小型打製石斧（第２図25、硬砂岩）　[時期] 出土石器と埋土の所見から、縄文時代の遺構と考えられる。

②ＳＤ14（挿図６、第２図26・27）

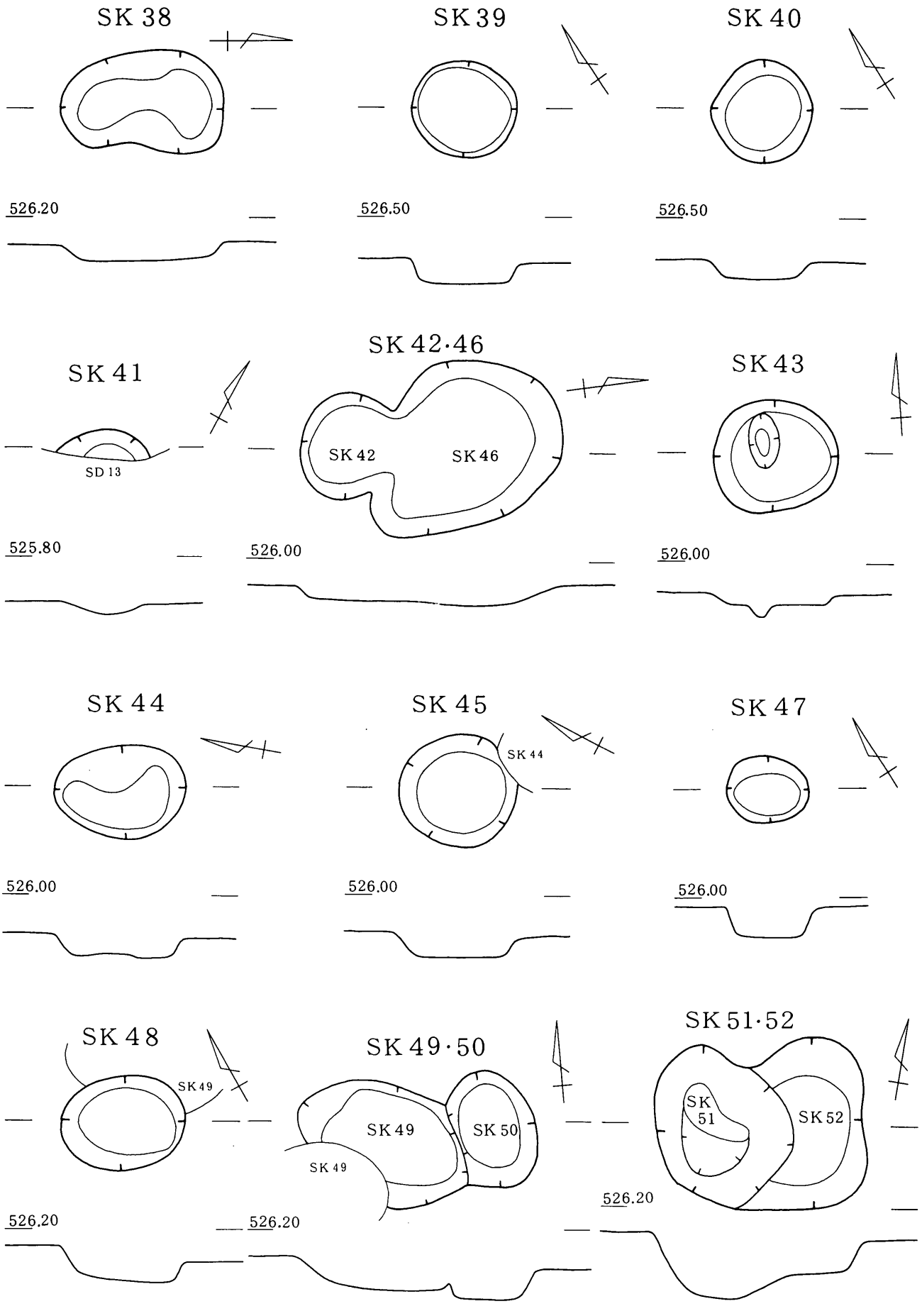
[検出位置] ＢＡ37付近　[規模] 2.1m以上×－m、深さ110cm　[形態] ごく一部分を把握したのみで、平面形は不明であるが、その機能からみて直線状を呈すると考えられる。断面形はやや開いたＶ字状を呈する　[長軸] Ｎ67°Ｅ　[重複] なし　[調査所見] 調査区南隅でごく一部分を把握したのみで、ほとんどが調査区外にかかる。埋土が以前に調査された弥生時代の周溝墓等と近似しており、該期の遺構とも考えたが、底面の状況から人工的に開削された水路と判断された　[壁] 緩やかな立ち上がりを示す　[底面] 底に10～20cm大の礫や砂利があり、水が流れた痕跡がある　[付属施設]なし　[出土遺物] 縄文土器片および横刃型石器（第２図26、硬砂岩）・小型打製石斧（27、緑色岩）が出土したが、混入と考えられる。小型打製石斧は著しく摩滅する　[時期] 時期の判る遺物はなく、詳細時期不明であるが、断面形状から中世の溝址と考えられる。



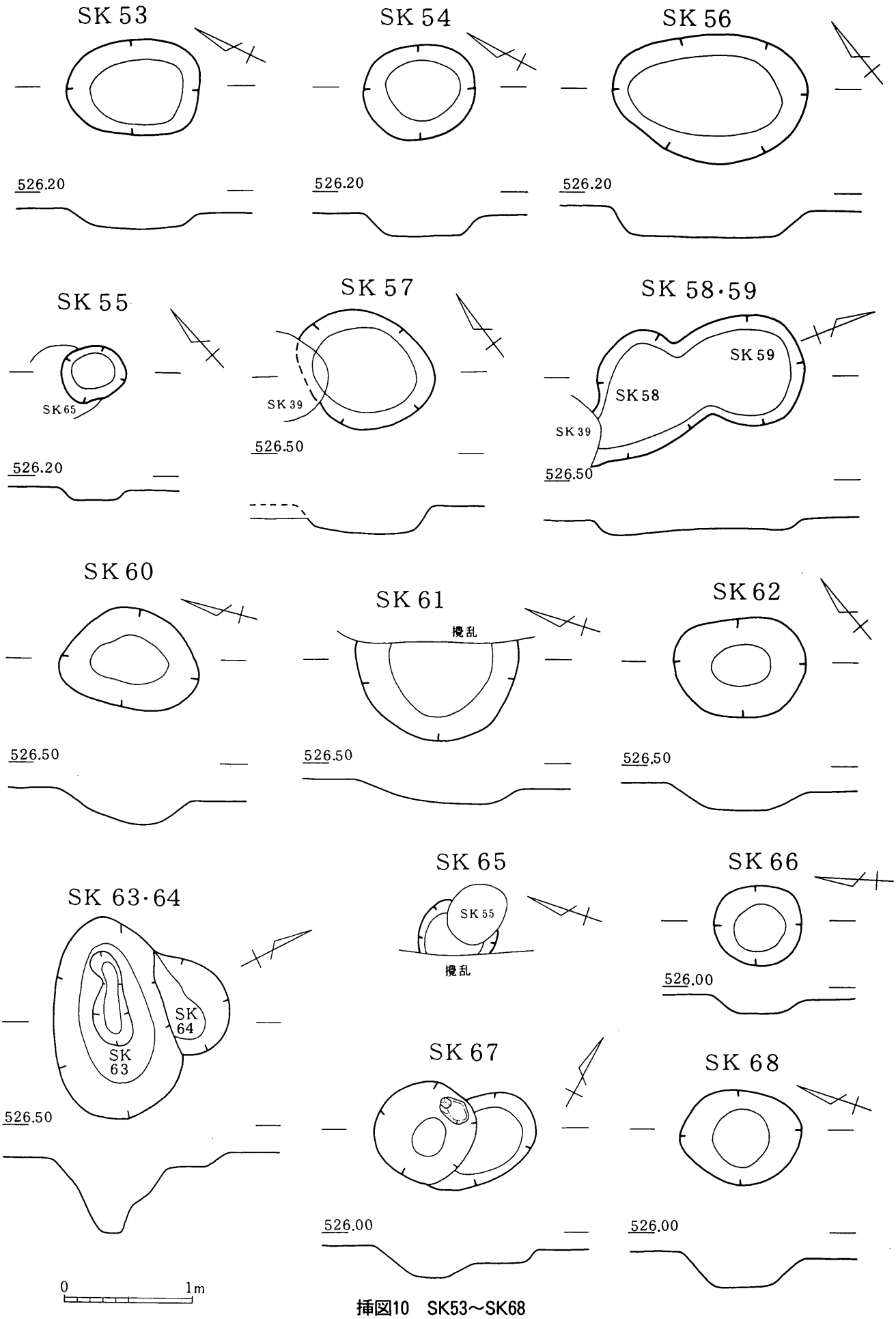
挿図7　SK10～SK23



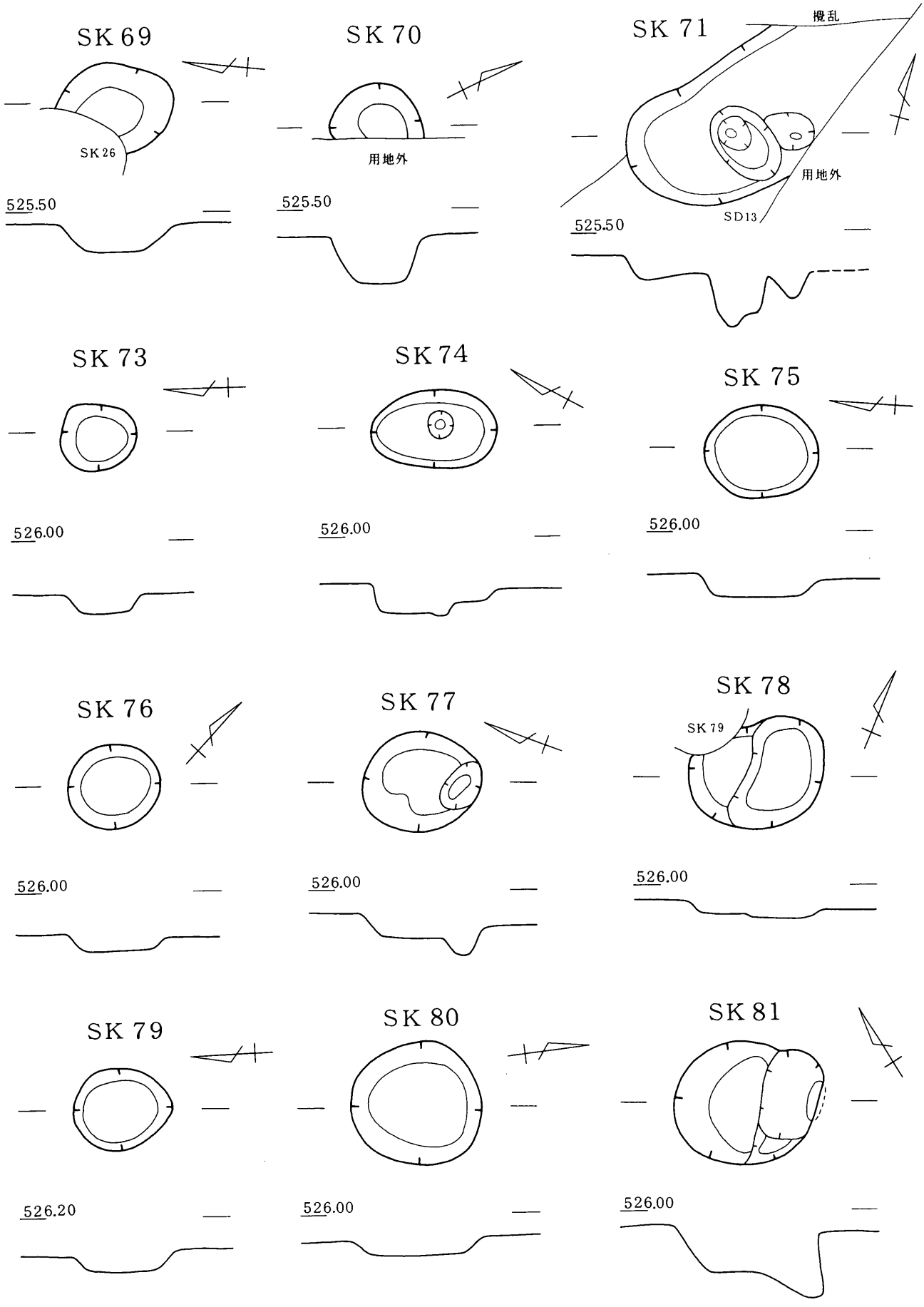
挿図 8　SK24～SK37



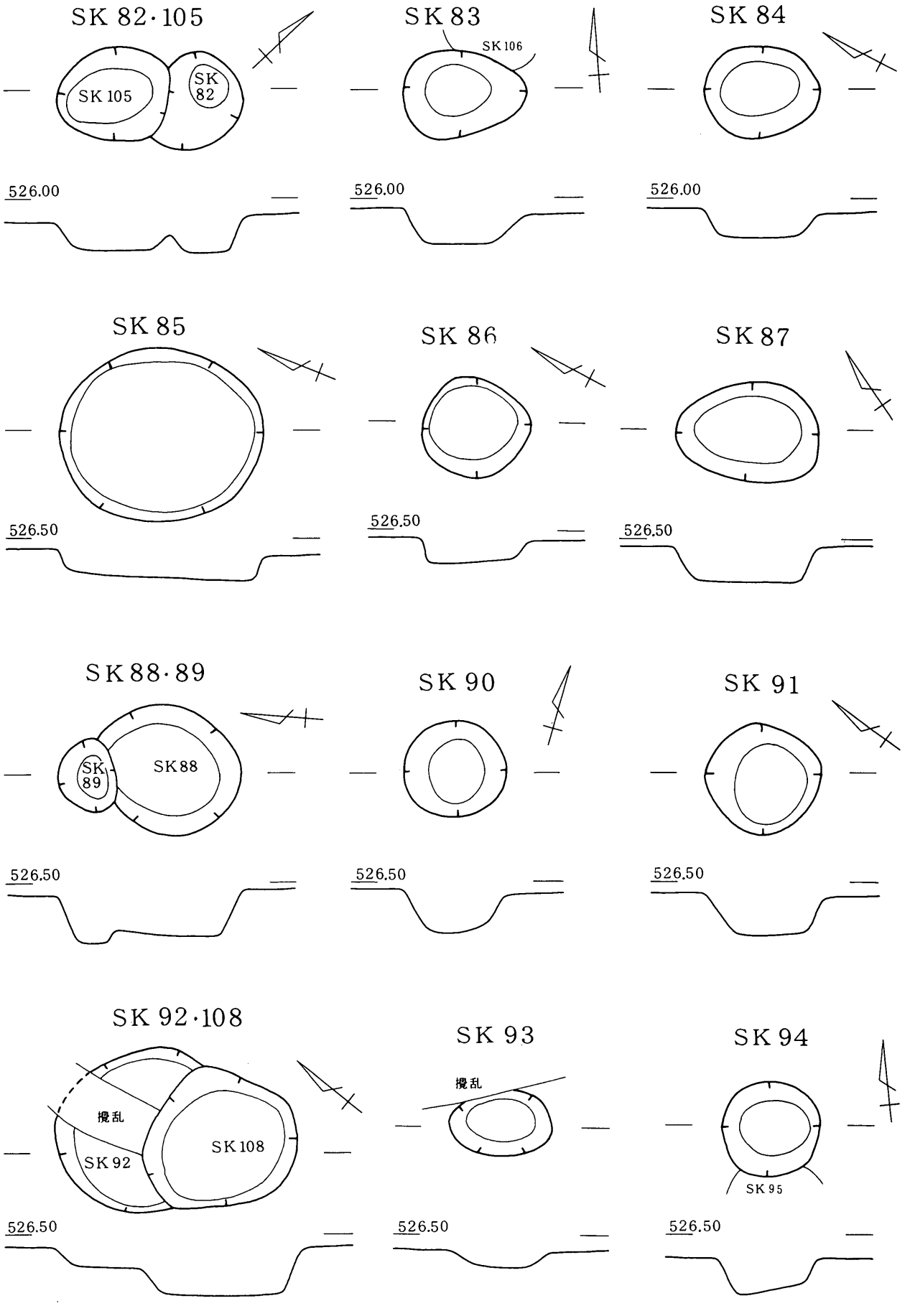
挿図9　SK38～SK52



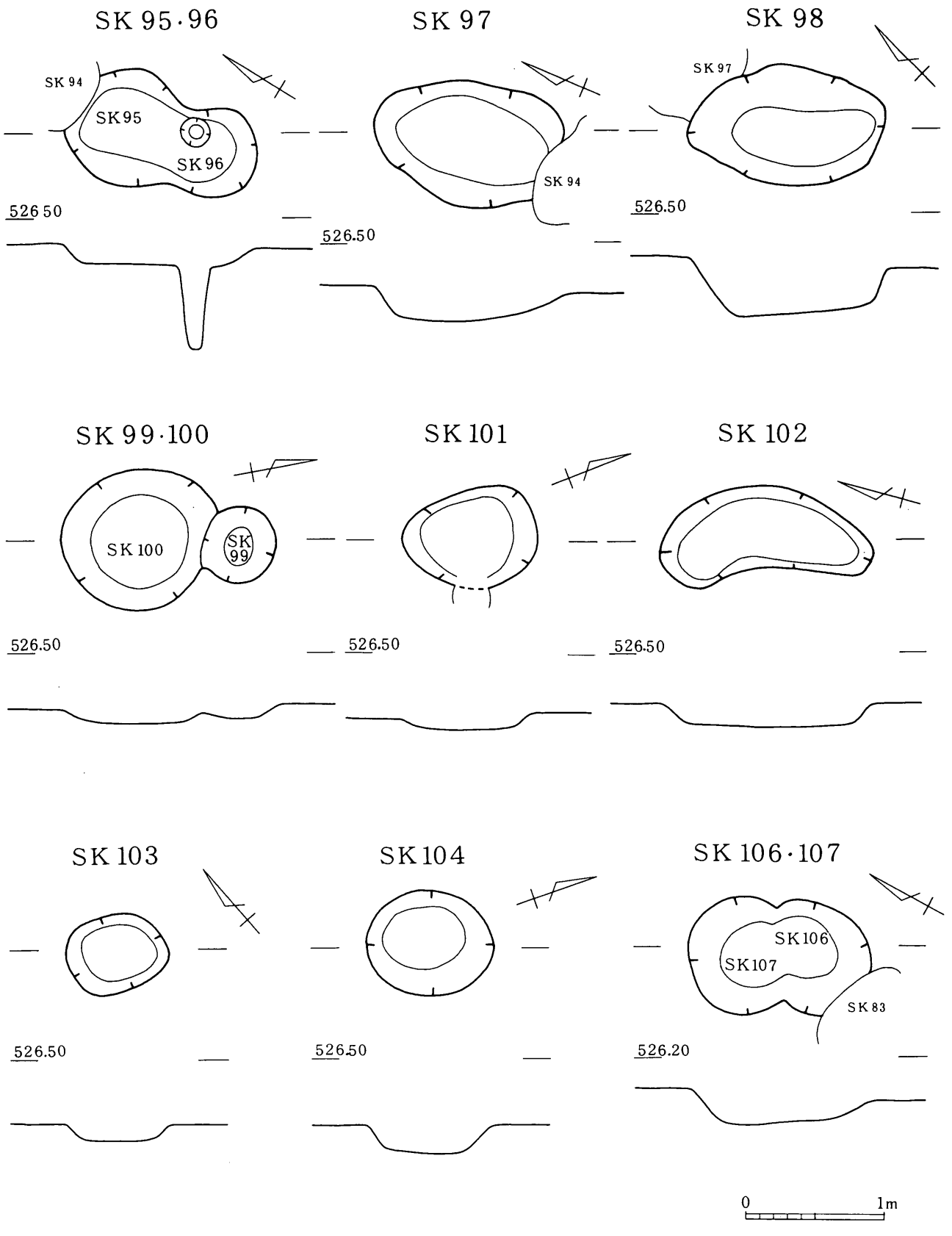
挿図10　SK53～SK68



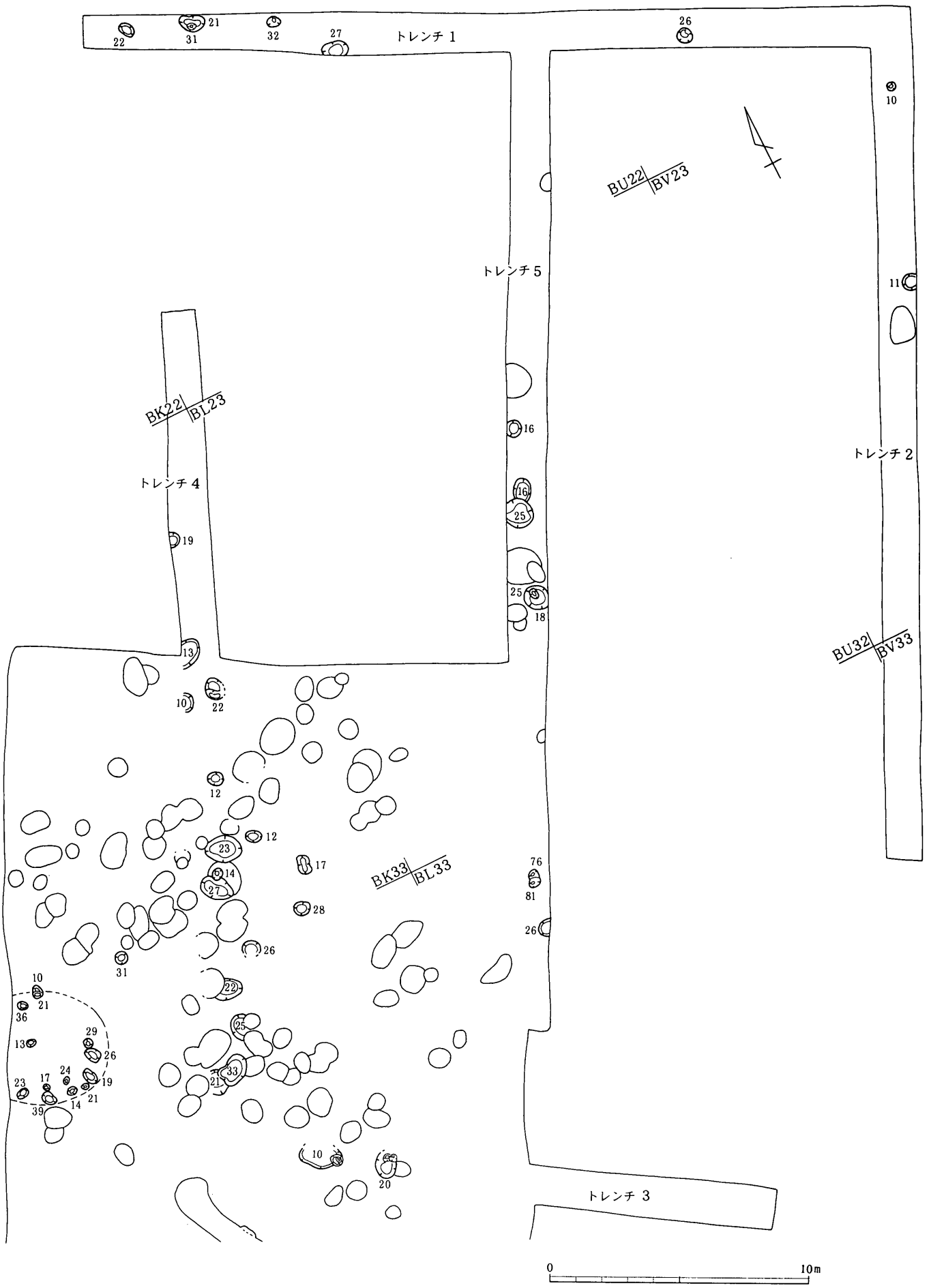
挿図11　SK69～SK71・SK73～SK81



挿図12　SK82～SK94・SK105・SK108



挿図13　SK95～SK104・SK106・SK107



挿図14　周辺柱穴平面図

(4)小柱穴（挿図14）

試掘調査時には、主に平面検出の際のサイズや遺物の有無によって土坑と小柱穴を区別したが、本調査時には概ね径30cmを超える落ち込みを全て土坑として扱った。両者の間には顕著な差は認められない。なお、本調査時ＳＢ15付近に検出された小柱穴は、埋土がぼそぼそで締まっておらず、新しい時期のものと判断された。

(5)遺構外出土遺物（第１・２図）

遺構外からは縄文時代の土器・石器、中世の遺物が出土している。13～17は縄文時代中期中葉末の土器で、13～15は細隆線文が、16・17は櫛形文が施される。18は単節斜縄文施文の土器で、中期と考えられる。19は山茶碗小碗である。28～33はいずれも硬砂岩素材で、28は小型打製石斧、29～32は横刃型石器、33は長軸方向の両端が打ち欠かれた礫石錘である。34は玻璃質安山岩素材の石錐である。

遺構名	層	JIS標準色票	土壌色	土性	しまり	粘性	備考
SB15炉	1	7.5YR4/4	褐	HC	良	強	ロームブロック
	2	10YR2/3	黒褐	SiC	良	強	10～100 のロームブロックを25%含む
	3	7.5YR2/2	黒褐	SiC	やや良	強	炭化物を含む
	4	7.5YR2/2	黒褐	SiC	良	強	10～20 のロームブロックを30%含む（炭混）
	5	10YR2/2	黒褐	SiC	不良	強	5～20 のロームブロックを20%含む（炭混）
SD14	1	10YR2/3	黒褐	SiC	不良	強	炭を含む
	2	10YR1.7/1	黒	SiC	やや良	強	
	3	10YR2/2	黒褐	SiC	不良	やや強	炭をわずかに含む　ロームブロックを10%含む
	4	7.5YR3/2	黒褐	SiC	良	強	
	5	7.5YR2/3	極暗褐	SiC	良	強	
	6	7.5YR3/2	黒褐	SiC	良	強	
	7	7.5YR3/4	暗褐	SiC	良	強	下部に砂礫を含む
	8	10YR3/4	暗褐	SiC	良	強	ロームブロックを40%含む

表１　土層観察表

第Ⅳ章　総　括

これまで調査地点周辺では、市道建設や民間開発に先立つ発掘・試掘調査の結果、弥生時代後期の居住域・墓域、中世と考えられる溝址が調査され、併せて極めて断片的ではあるものの縄文時代の遺構・遺物が確認されている。

今次調査の結果、縄文時代中期中葉から後葉にかけての集落址の一端が明らかにされた。試掘調査結果では、事業計画地の南東側一画に土坑・柱穴の集中がみられ、この部分を含む南側一帯に該期集落が展開すると予想された。しかし、本調査結果では、土坑集中部分は帯状に分布すること、その南側に竪穴住居址があり、両者の間に弧状の溝址があることが明らかにされた。

縄文時代の集落は一般的に環状構造をとることが明らかにされているが、本遺跡においてもこうした集落構造がとられていた可能性が高い。すなわち、事業計画地が集落中央の広場的な空間にあたり、その外側に墓址と考えられる土坑群、さらに外側に区画と考えられる溝（ＳＤ13）をはさんで居住域が広がることが考えられる。しかし、厳密に考えると、広場の北側対辺の土坑群・竪穴住居址は確認されておらず、地形に制約されて半環状を呈さざるを得なかったことが考えられる。

縄文時代の遺物の中で注意される存在として、ＳＫ22から出土した安山岩素材の剥片がある。安山岩が石器の石材として使用されている割合は、飯田市内の縄文時代集落では極端に低く、地区内立野遺跡・増泉寺付近遺跡や座光寺美女遺跡・上郷黒田大明神原遺跡等で確認されている。今次調査で出土した安山岩素材の剥片は、剥離面の風化がそれほど進んでいないことから縄文時代中期を遡ることはないと考えられるが、立野遺跡・黒田大明神原遺跡・美女遺跡等草創期・早期の遺跡で出土していることは縄文時代前半期には石材の一部に安山岩が使用されていたことを示すとみてよかろう。また、これらの遺跡は高位段丘上に位置するという共通性が指摘できる。石器石材としての安山岩の使用がどこまで遡るのか、また、分布に偏りが見られるのか否か等々今後明らかにしていく必要があろう。

続く弥生時代については遺構・遺物は確認できず、市道熊野殿岡線建設時に確認された周溝墓が墓域の東端にあたることがほぼ確実となった。遺跡の南側を流れる新川は平成８年度の調査地点周辺では比高差約10ｍであるが、この東側付近から深く谷を刻んでおり、こうした地形的な制約から集落の広がりが抑えられたことが考えられる。

形態から中世に比定した溝址は、出土遺物がないことからなお詳細時期は不明である。今次調査地点の南側の店舗建設に先立つ試掘調査では溝址が確認されており、新川から導水して丘陵上の開発が行われたと考えられる。本遺跡の北側に位置する殿原遺跡では、平安時代後期以降に灌漑水路が開削されたことが明らかにされており、大井開削の歴史を考える上で重要な所見が得られている。また、三日市場大原遺跡でも上半は約45°の勾配で、そして下半が直に掘り込まれる水路が確認されている。これらの水路は共通して丘陵のほぼ頂部に開削されている。水路の両側に水を分配するため必然的にこうした占地となったと考えられる。

中世には本遺跡周辺は伊賀良庄に含まれており、鎌倉時代には北条江馬氏の地頭代四条金吾が居住したと推測される地とも至近距離にある。そうした中で、今次調査で把握された溝址は、中位段丘上の開

発の歴史を解明する上で貴重な材料を提供したといえる。

以上のとおり、本遺跡の縄文時代・弥生時代・中世の各時代に関する新たな知見が得られ、地域史解明につながる成果がまた一つ積み上げられた。今後調査地点周辺で文化財保護の本旨に則ったたゆまぬ保護活動を行うこと、そして、今次調査で得られた成果の利活用を図ることが肝要である。

《引用参考文献》

飯田市教育委員会　1977　『伊賀良中島平』

飯田市教育委員会　1978　『伊賀良宮ノ先』

飯田市教育委員会　1983　『鳥屋平遺跡』

飯田市教育委員会　1987a　『殿原遺跡』

飯田市教育委員会　1987b　『飯田垣外遺跡　火振原遺跡　梅ヶ久保遺跡』

飯田市教育委員会　1988a　『小垣外・八幡面遺跡』

飯田市教育委員会　1988b　『北方遺跡群』

飯田市教育委員会　1989a　『高野遺跡』

飯田市教育委員会　1989b　『下原遺跡』

飯田市教育委員会　1990　『細田北遺跡』

飯田市教育委員会　1991a　『公文所前遺跡』

飯田市教育委員会　1991b　『直刀原遺跡』

飯田市教育委員会　1991c　『大原遺跡』

飯田市教育委員会　1991d　『樋明古墳』

飯田市教育委員会　1992a　『入野遺跡』

飯田市教育委員会　1992b　『直刀原遺跡・河原林遺跡』

飯田市教育委員会　1992c　『殿原遺跡』

飯田市教育委員会　1994　『中村中平遺跡』

飯田市教育委員会　1995a　『小垣外・辻垣外遺跡』

飯田市教育委員会　1995b　『北方大原遺跡Ⅱ』

飯田市教育委員会　1995c　『経塚原遺跡　経塚原1号古墳　経塚原2号古墳』

飯田市教育委員会　1996a　『中川遺跡・一ツ塚古墳』

飯田市教育委員会　1996b　『増泉寺付近遺跡　三尋石遺跡・三尋石遺跡Ⅱ　富士塚遺跡・富士塚遺跡Ⅱ　富の平遺跡』

飯田市教育委員会　1997　『柵口遺跡』

飯田市教育委員会　1998a　『美女遺跡』

飯田市教育委員会　1998b　『はりつけ原遺跡Ⅱ』

飯田市教育委員会　1999　『三尋石遺跡Ⅲ』

飯田市教育委員会　2000　『三尋石遺跡Ⅳ』

飯田市教育委員会　2002　『開善寺境内遺跡』

遺構名	検出位置	法量(cm)	長軸	平面形	JIS標準色票	土壌色	土性	出土遺物(図版外)	時期	備考
SK10	BT22	－×65×32(68)	N10° W	－						試掘時把握
SK11	BQ25	－×130×50	N25° E	－						試掘時把握
SK12	BP29	80×(80)×17(28)	－	不整円形				土器小片 1	縄文	試掘時把握、朱
SK13	BO29	－×46×13	N62° W	－				平行沈線文等小片 3	縄文中期初頭？	試掘時把握
SK14	BO31	46×－×17	N67° W	－				土師質鉢？混入	縄文中期中葉末	試掘時把握
SK15	BP28	－×135×23(32)	N25° E	－						試掘時把握、炭
SK16	BP28	93×53×30	N80° E	楕円				土器小片 1	縄文	試掘時把握
SK17	BH31	148×-×19	N88° E	－				無文部 2	縄文中期	試掘時把握
SK18	BI30	75×55×30	N40° E	楕円？						試掘時把握
SK19	BH30	48×46×27	－	円形						試掘時把握
SK20	BG32	－×94×14(25)	N 7 ° W	－				土器極小片 2	縄文	試掘時把握
SK21	BG33	115×－×20	N62° W	－						試掘時把握
SK22	BH32	115×90×20	N23° W	楕円？				土器小片 3、剥片(安山岩)	縄文中期	試掘時把握
SK23	BH32	122×(90)×22	N2° W	楕円？				土器小片 1	縄文中期	試掘時把握
SK24	BY27	140×92×64	N70° W	不整楕円				沈線文等小片 6	縄文中期後葉？	試掘時把握
SK25	BD35	93×68×11	N85° E	楕円	10YR3/2	黒褐	SiC	横刃型石器(緑色岩)、剥片(硬砂岩)		
SK26	BC34	102×87×19	N12° E	不整楕円	10YR3/4	暗褐	SiC			
SK27	BF34	90×85×31	N75° W	不整楕円	10YR2/2	黒褐	SiC			
SK28	BG33	74×60×20	N87° W	楕円	10YR2/3	黒褐	SiC			
SK29	BE31	－×95×31	N13° W	楕円？	10YR2/2	黒褐	SiC	剥片(安山岩)	縄文中期中葉末	炭
SK30	BE31	－×78×29	N25° W	不整形	10YR2/3	黒褐	SiC			
SK31	BE30	－×70×32	N43° W	－	10YR3/4	暗褐	SiC			
SK32	BE30	－×90×39	M32° W	－	10YR2/3	黒褐	SiC	沈線文小片 1	縄文中期中葉末	
SK33	BE30	65×47×34	N35° W	楕円	10YR3/4	暗褐	SiC	土器小片 1	縄文中期	
SK34	BE29	150×75×19	N10° E	楕円	10YR2/3	黒褐	SiC	土器小片 1	縄文中期	
SK35	BF29	59×55×22	N50° W	楕円	10YR2/3	黒褐	SiC			
SK36	BF29	63×50×18	N70° W	楕円	10YR2/3	黒褐	SiC			
SK37	BE29	65×65×22	－	不整円形	10YR3/4	暗褐	SiC			
SK38	BE28	116×65×14	N3° W	不整形	10YR3/4	暗褐	SiC			
SK39	BG30	75×67×19	N35° W	楕円	10YR2/2	黒褐	SiC			
SK40	BG28	75×74×19	－	円形	10YR2/2	黒褐	SiC			
SK41	BF37	－×－×8	－	－	10YR3/2	黒褐	SiC			
SK42	BF34	80×75×13	N35° W	楕円？	10YR3/2	黒褐	SiC			
SK43	BG35	90×80×11(21)	N85° W	不整楕円	10YR3/4	暗褐	SiC			
SK44	BF35	95×70×17	N9° W	楕円	10YR3/3	暗褐	SiC	土器極小片、剥片(硬砂岩)	縄文	

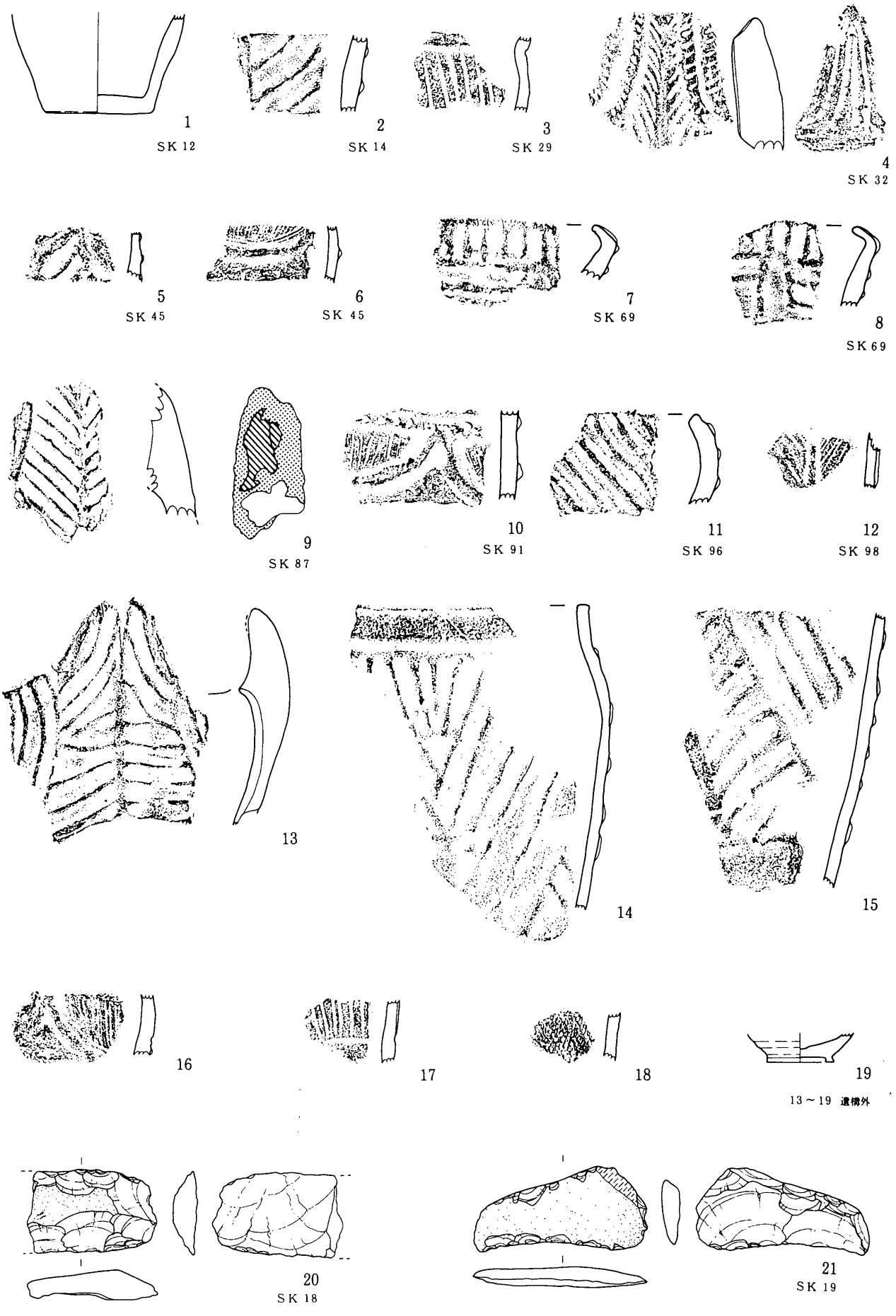
表 2　遺構属性表（1）

遺構名	検出位置	法量(cm)	長軸	平面形	JIS標準色票	土壌色	土性	出土遺物(図版外)	時期	備考
SK45	BF34	88×82×21	N25° W	楕円	10YR2/2	黒褐	SiC	平行沈線文2他小片5		縄文中期中葉末
SK46	BG34	156×120×23	N42° W	不整楕円	10YR2/3	黒褐	SiC			
SK47	BF31	60×48×23	N50° W	楕円	10YR3/4	暗褐	SiC		縄文	
SK48	BF31	92×70×27	N63° W	楕円	10YR2/3	黒褐	SiC		縄文中期初頭？	
SK49	BF31	137×84×24	N63° W	楕円	10YR2/3	黒褐	SiC		縄文中期中葉末	
SK50	BF31	84×(60)×26	N17° W	楕円	10YR3/4	暗褐	SiC	土器小片1		縄文
SK51	BG31	118×109×52	N24° W	不整形	10YR2/3	黒褐	SiC		縄文	
SK52	BG31	125×－×29	N9° W	不整形	10YR3/3	暗褐	SiC		縄文中期	
SK53	BG31	100×70×16	N25° W	不整楕円	10YR3/4	暗褐	SiC			
SK54	BG31	85×73×18	N35° W	楕円	10YR3/4	暗褐	SiC			
SK55	BH30	50×42×9	N45° W	楕円	10YR3/1	黒褐	SiC		縄文	
SK56	BF30	150×97×24	N46° W	楕円	10YR3/3	暗褐	SiC			
SK57	BG30	110×90×27	N34° W	楕円	10YR2/2	黒褐	SiC		縄文中期	
SK58	BH29	100×85×14	N50° W	不整形	10YR3/4	暗褐	SiC		縄文中期	
SK59	BH30	100×80×11	N35° E	不整形	10YR3/4	暗褐	SiC		縄文中期後葉？	
SK60	BI30	105×75×29	N12° W	不整楕円	10YR3/3	暗褐	SiC			
SK61	BI29	124×-×13	N17° W	楕円	10YR3/3	暗褐	SiC	沈線文等小片2		縄文中期後葉？
SK62	BJ30	112×74×19	N55° W	楕円	10YR3/4	暗褐	SiC	細隆線文小片1		縄文中期中葉末
SK63	BH27	150×94×63	N74° W	楕円	10YR2/3	黒褐	SiC	細隆線文小片1		縄文中期中葉末
SK64	BI27	－×－×11	－	－	10YR3/4	暗褐	SiC		縄文中期中葉末	
SK65	BH30	－×(55)×－	N50° W	楕円？	10YR3/4	暗褐	SiC			
SK66	BG34	68×60×14	N5° E	楕円	10YR3/3	暗褐	SiC			
SK67	BG34	125×80×16(27)	N65° E	不整形	10YR3/4	暗褐	SiC		縄文中期中葉末	
SK68	BG35	95×75×27	N20° W	楕円	10YR3/4	暗褐	SiC	土器小片1	縄文中期	縄文中期
SK69	BC34	88×65×21	N13° W	楕円？	10YR3/4	暗褐	SiC		縄文中期	縄文中期中葉末
SK70	BF40	67×－×36	N23° E	－	10YR3/4	暗褐	SiC			
SK71	BH40	－×98×19(56)	N42° E	－	7.5YR2/2	黒褐	SiC			
SK73	BH38	54×50×15	N0° E	不整楕円	7.5YR3/3	暗褐	SiC			
SK74	BG37	90×55×22(24)	N28° W	楕円	7.5YR3/3	暗褐	SiC			
SK75	BH38	83×68×17	N4° W	楕円	7.5YR3/4	暗褐	SiC			
SK76	BI38	68×61×15	N45° E	楕円	7.5YR4/4	褐	SiC			
SK77	BH36	90×75×17(29)	N28° W	楕円	7,5YR3/4	暗褐	SiC			
SK78	BI36	115×78×10(13)	N50° E	不整楕円	7.5YR3/4	暗褐	SiC			
SK79	BI36	72×60×20	N0° E	楕円	7.5YR3/3	暗褐	SiC	無文部小片1		縄文中期
SK80	BG36	95×90×10	N6° E	不整楕円	7.5YR3/4	暗褐	SiC		縄文	

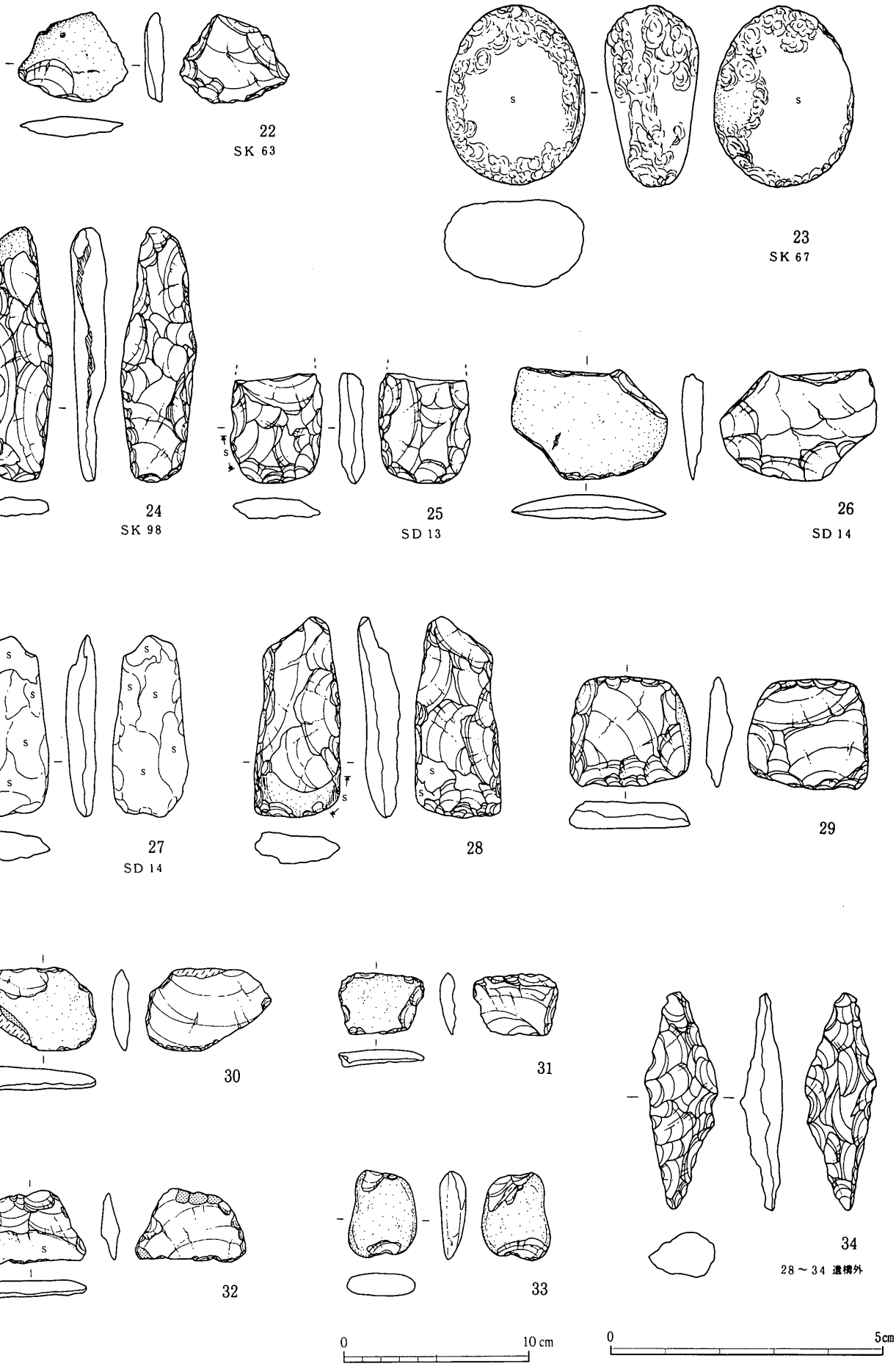
表3　遺構属性表（2）

遺構名	検出位置	法量(cm)	長軸	平面形	JIS標準色票	土壌色	土性	出土遺物(図版外)	時期	備考
SK81	BH36	105×90×36(45・55)	N55° W	不整形	7.5YR3/3	暗褐	SiC			
SK82	BH35	82×60×32	N7° W	楕円？	7.5YR3/3	暗褐	SiC			
SK83	BH35	90×63×27	N90° E	楕円	7.5YR3/3	暗褐	SiC			
SK84	BH34	85×65×22	N27° W	楕円	7.5YR3/4	暗褐	SiC			
SK85	BJ29	150×126×25	N20° W	楕円	7.5YR3/3	暗褐	SiC	無文部小片 1	縄文中期後葉？	
SK86	BK29	75×75×20	N37° W	不整円形	7.5YR3/4	暗褐	SiC			
SK87	BK28	115×74×26	N55° W	楕円	7.5YR3/4	暗褐	SiC	細隆線文他極小片多数	縄文中期中葉末	
SK88	BL29	110×95×33	N11° E	楕円	7.5YR3/4	暗褐	SiC			
SK89	BL29	54×40×40	N75° E	不整楕円	7.5YR3/4	暗褐	SiC			
SK90	BL29	74×70×31	－	円形	7.5YR3/4	暗褐	SiC	土器極小片 3	縄文	
SK91	BK30	85×80×32	－	不整円形	7.5YR3/4	暗褐	SiC			
SK92	BL30	－×120×14	N45° W	－	7.5YR3/4	暗褐	SiC	細隆線文・櫛形文唐小片 9	縄文中期中葉末	ＳＫ108を切る
SK93	BL30	75×45×12	N5° E	楕円	7.5YR3/4	暗褐	SiC			
SK94	BL31	73×70×26	－	円形	7.5YR3/4	暗褐	SiC			
SK95	BK31	－×80×16	N7° W	楕円？	7.5YR4/4	褐	SiC	隆帯＋縄文小片 1	縄文中期後葉	
SK96	BK31	－×60×18(76)	N30° W	－	7.5YR3/4	暗褐	SiC	小把手 1 、剥片(硬砂岩)	縄文中期中葉末	
SK97	BK34	135×90×26	N13° W	楕円	7.5YR3/4	暗褐	SiC			
SK98	BJ34	140×84×37	N45° W	楕円	7.5YR3/4	暗暗	SiC		縄文中期後葉	
SK99	BK34	55×50×12	N75° W	楕円	7.5YR3/4	暗褐	SiC			
SK100	BK34	114×100×14	N8° W	楕円	7.5YR3/4	暗褐	SiC			
SK101	BJ35	95×68×12	N20° E	不整楕円	7.5YR4/4	褐	SiC			
SK102	BL35	150×60×21	N15° W	不整形	7.5YR3/4	暗褐	SiC			
SK103	BK36	60×52×14	N65° W	不整楕円	7.5YR3/3	暗褐	SiC			
SK104	BJ36	90×75×21	N17° E	楕円	7.5YR3/4	暗褐	SiC			
SK105	BG35	85×73×27	N23° E	不整楕円	7.5YR3/2	黒褐	SiC	隆帯文等小片 3	縄文中期後葉	
SK106	BH35	(90)×70×19	N23° E	楕円？	7.5YR3/4	暗褐	SiC			
SK107	BI35	80×－×27	N57° E	－	7.5YR3/3	暗褐	SiC	無文部小片 1	縄文中期後葉？	
SK108	BK30	107×103×28	－	不整円形	7.5YR3/4	暗褐	SiC			ＳＫ92に切られる
SD13	BF38	1100以上×145×21 小　80×9	北N44° E 南N58° E	湾曲	10YR2/2	黒褐	SiC		縄文中期	
SD14	BA37	210以上×－×110	N67° E	直線状	10YR2/2	黒褐	SiC	混入と考えられる縄文土器片 2	中世	炭

表４　遺構属性表（３）



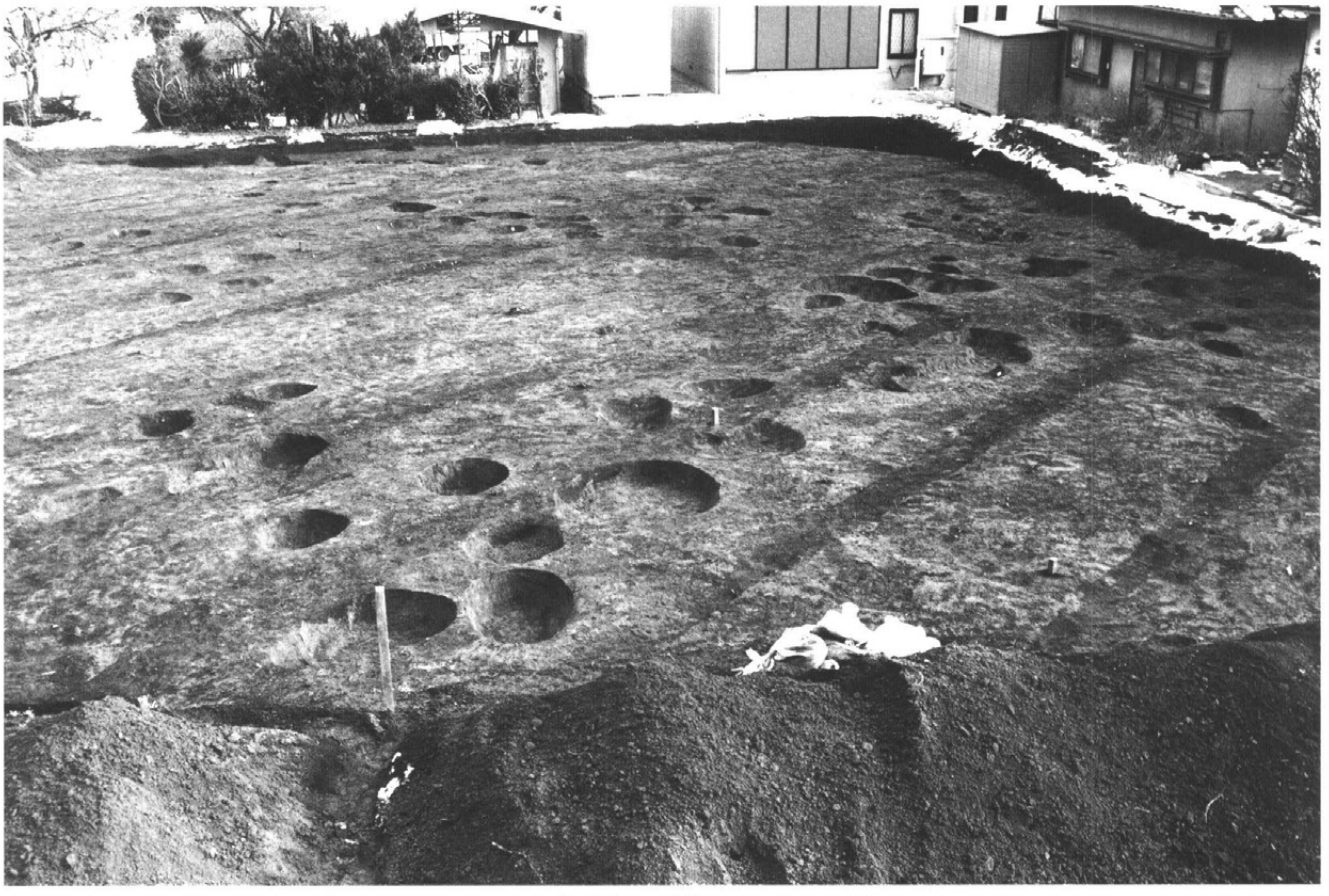
第1図　遺構および遺構外出土遺物（1）　0　10cm



第２図　遺構および遺構外出土遺物（２）

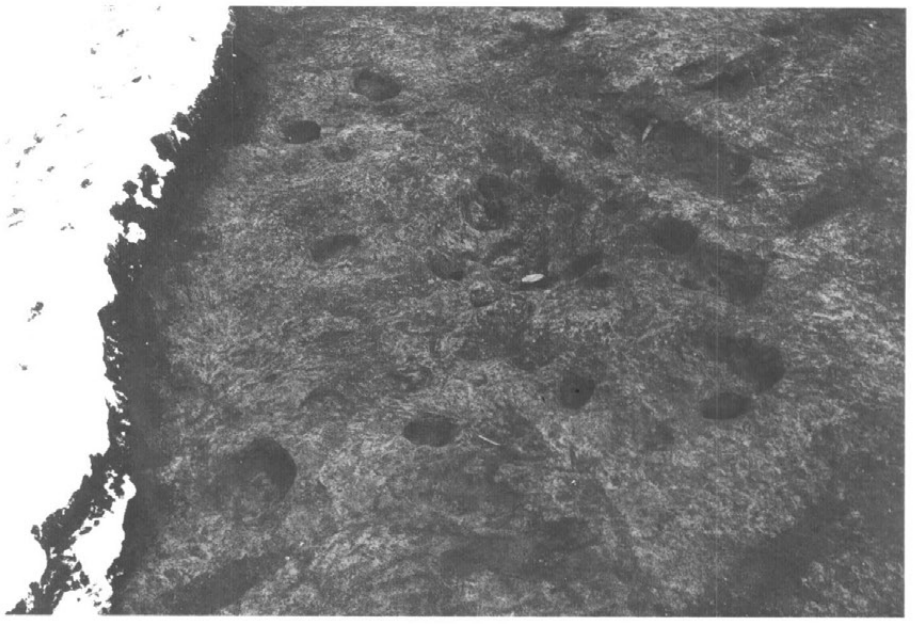
写　真　図　版

図版 1



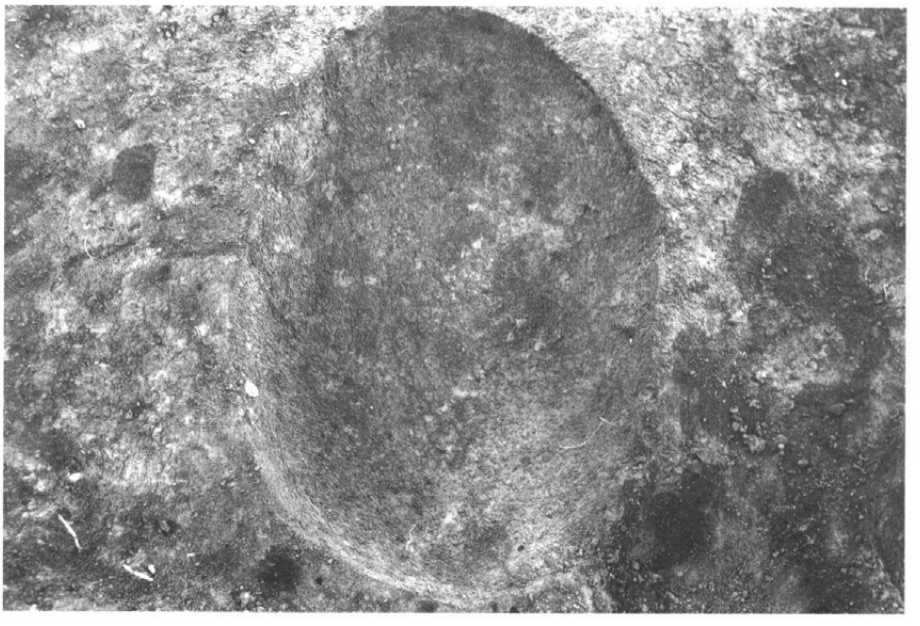
調査区全景（北西から）

調査区全景（北東から）



SB15

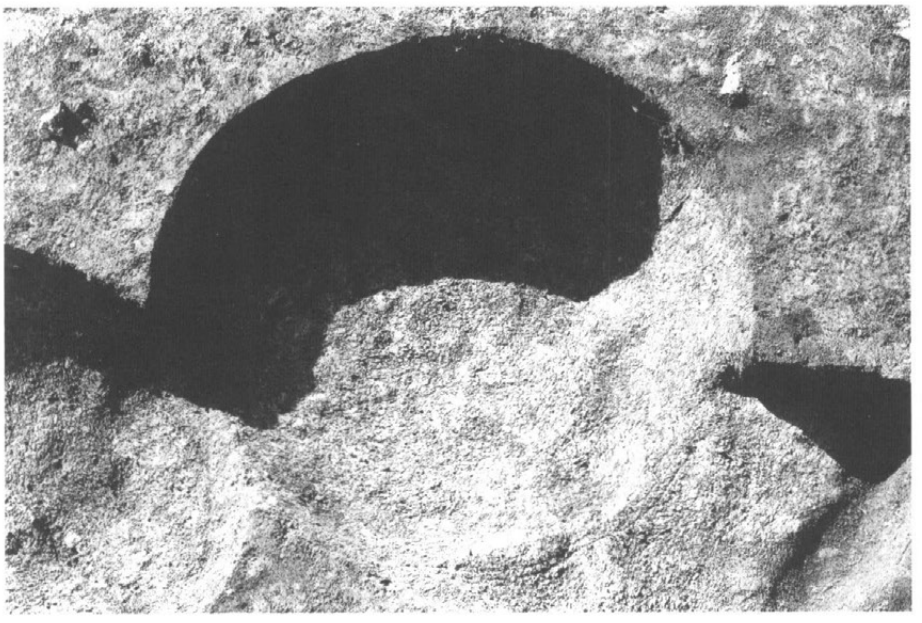
同　炉



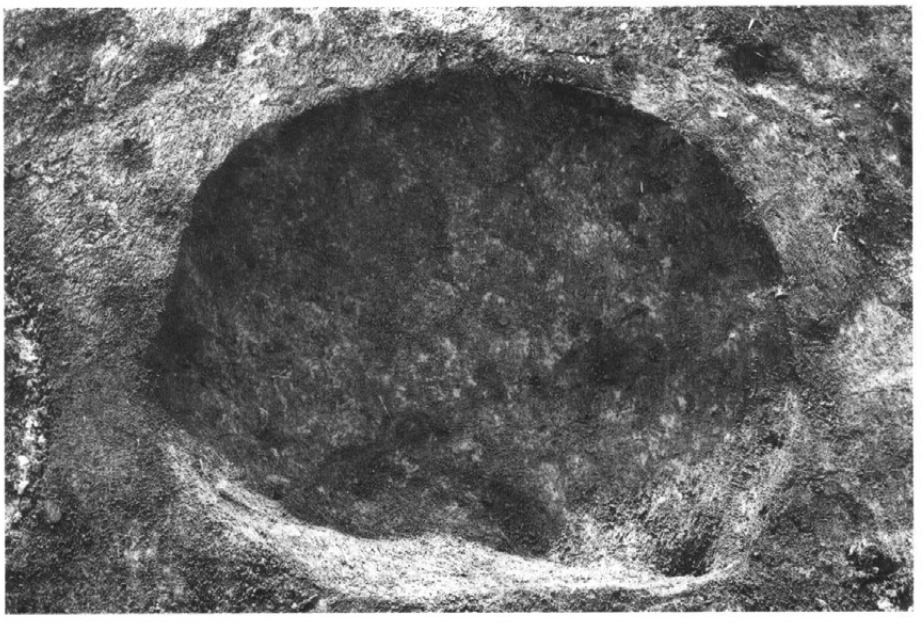
SK33

図版 3

SK44

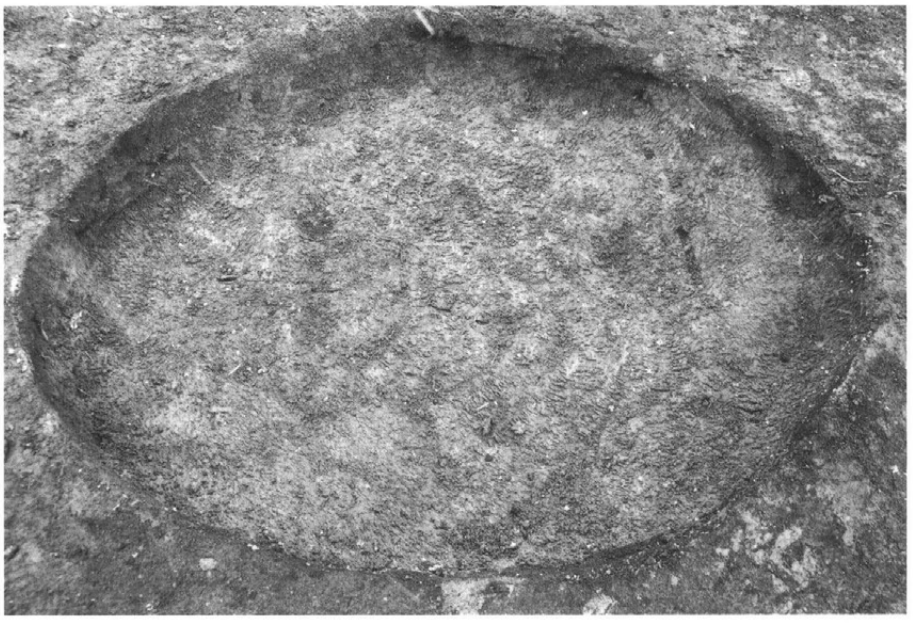


SK45



SK54

SK62

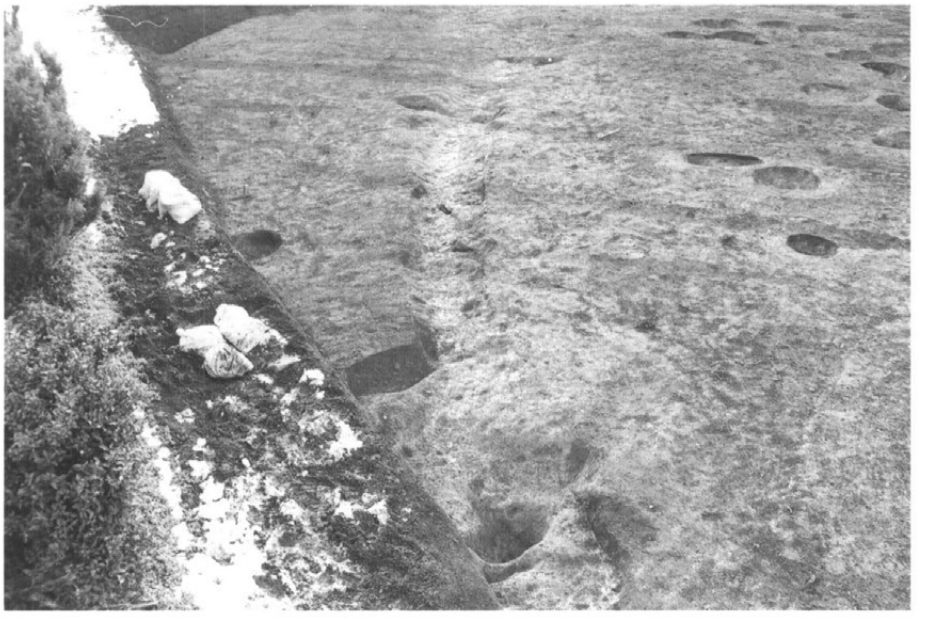


SK85

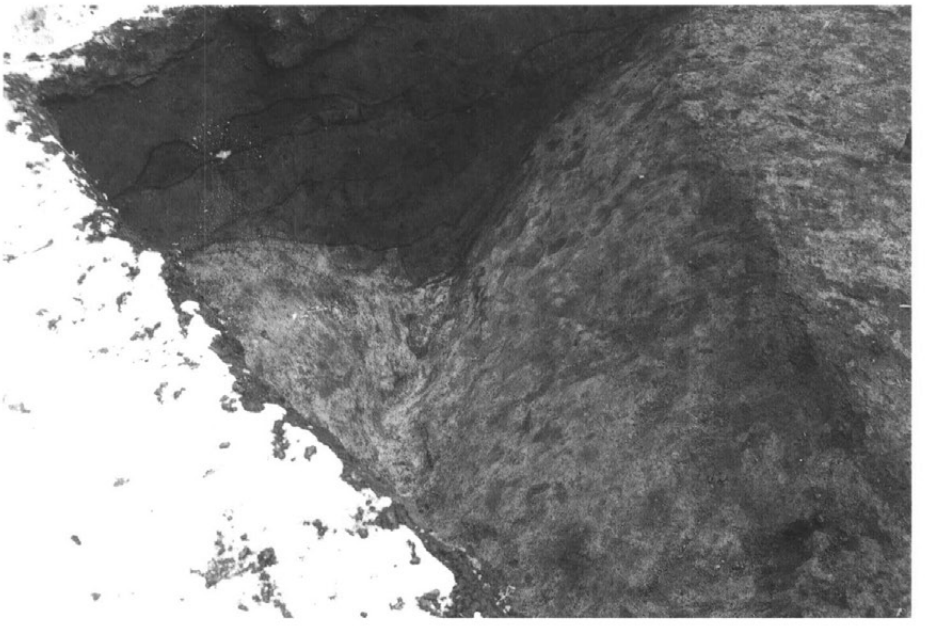
SK87

図版 5

SK104



SD13



SD14

重機作業風景

発掘作業風景

同　　上

報告書抄録

ふりがな	はりつけばらいせき
書名	はりつけ原遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	馬場保之
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395-0002　長野県飯田市上郷飯沼3145番地　TEL.0265-53-4545
発行年月日	平成14年12月　日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
はりつけ原(はりつけばら) 遺跡(いせき)	飯田市 大瀬木 220-1	20205		35° 29′ 30″	137° 48′ 15″	平成13年 12月14日～ 平成14年 1月9日	527㎡	倉庫建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
はりつけ原(はりつけばら) 遺跡(いせき)	集落址	縄文時代 中期 中世	竪穴住居址　1棟 土坑　98基 溝址・溝状址　2条 小柱穴	縄文時代 土器 石器 中世山茶碗	縄文時代中期中葉～後葉の集落址の一画が調査され、集落景観の一部が把握された。 また、中世と考えられる溝址が調査され、中位段丘上の開発の歴史を物語るものとして注目される。

はりつけ原（ばらいせき）遺跡

2002年12月　発行

編集・発行　長野県飯田市上郷飯沼3145番地
長野県飯田市教育委員会

印　　刷　飯田共同印刷株式会社